氷見市埋蔵文化財調査報告第25冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅴ

１９９７年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室
１９９８年３月

氷見市埋蔵文化財調査報告第25冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅴ

１９９７年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室
１９９８年３月

序

富山湾に面し海の幸，山の幸に恵まれた氷見市は，古くより人々の生活の場として，数多くの文化遺産を育み，守ってきました。

特に，大正７年に調査された大境洞窟は，日本で最初の洞窟遺跡調査として，同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として，学史にその名を留め，国指定史跡になっております。

しかしながら，近年，生活の豊かさ，利便さを求めて開発が進められる一方で，これらの貴重な文化遺産の保護のための営みも重視されているのであります。

市教育委員会といたしましては，文化遺産保護のため，市内全域の詳細分布調査を実施することにより，より充実した遺跡地図を作成することにいたしました。

文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することは，真の地域社会の発展につながるものであると考えます。

この報告書がより多くの方々に利用され，文化財保護の一助となることを願っております。

終わりに，調査の実施及び報告書の作成にあたり，ご協力いただきました地元の方々，またご援助いただきました富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に，厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

氷見市教育委員会
教育長　江　幡　　武

例　　言

1　本書は，富山県氷見市教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第5年（1997年）度の報告書である。

2　調査にあたっては，富山県埋蔵文化財センター及び富山大学考古学研究室の指導と協力を得て，後記の調査団を編成してこれを実施した。

3　遺物整理・実測・製図・写真撮影は，氷見市教育委員会生涯教育課主任学芸員大野究と富山大学考古学研究室の全員が協力して行った。

4　本文は，宇野隆夫・前川 要（富山大学人文学部），大野 究（氷見市教育委員会），田中幸生・山崎雅恵（富山大学大学院人文科学研究科学生），荒木慎也・飯田良智・磯村愛子・佐々木亮二・砂田普司・高橋泰生・遠野いずみ・貫井美鈴・廣瀬直樹・真井田宏彰・宮川俊輔・渡辺 樹（富山大学人文学部考古学研究室学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。

5　参考文献は本文末に一括し，通し番号を付して記した。

6　遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図と写真の番号は統一して用いた。

7　採集遺物・記録書類は氷見市教育委員会で保管公開している。

8　編集は宇野隆夫・前川 要・大野 究の指導の下に，田中幸生・山崎雅恵が行った。

目　　次

第１章　はじめに…… 1

1　調査の目的…… 1

2　調査の経過…… 1

3　氷見市の地勢と自然環境…… 4

4　1997年度調査区の地勢と地区割…… 4

第２章　分布調査の成果 …… 7

1　遺跡と採集遺物…… 7

(1)　阿尾島田Ａ遺跡 …… 7
(2)　阿尾島田Ｂ遺跡 …… 7
(3)　稲積城跡 …… 7
(4)　稲積前田遺跡 …… 7
(5)　稲積西ケ谷遺跡 …… 7
(6)　稲積後池遺跡 …… 8
(7)　余川親ケ谷内遺跡 …… 8
(8)　余川川河床遺跡 …… 8
(9)　余川海老田遺跡 …… 9
(10)　余川古寺谷遺跡 …… 9
(11)　余川寺ケ谷遺跡 …… 9
(12)　余川片畑遺跡 …… 9
(13)　余川善名遺跡 …… 9
(14)　余川谷村遺跡 …… 9
(15)　余川市谷遺跡 …… 10
(16)　一ノ瀬遺跡 …… 10
(17)　柴峠城跡 …… 10
(18)　一刎前田遺跡 …… 10
(19)　懸札上ノ前遺跡 …… 11
(20)　懸札宮が谷遺跡 …… 11
(21)　懸札ホウシバラ遺跡 …… 11
(22)　その他の採集遺物 …… 11

2　遺物の散布状態……13

(1)　縄紋時代遺物の散布状態 …… 13
(2)　弥生･古墳時代遺物の散布状態 …… 13
(3)　古代遺物の散布状態 …… 13
(4)　中世遺物の散布状態 …… 13
(5)　近世遺物の散布状態 …… 13
(6)　小結 …… 17

第３章　おわりに……18

参考文献……20

図版目次

関連頁

図版1　E地区航空写真(1) …… 1947年撮影 …… 1～6
図版2　E地区航空写真(2) …… 1992年撮影 …… 1～6
図版3　遺物実測図 …… 砂田・高橋作成 …… 7～12
図版4　遺物写真 …… 田中・山崎撮影 …… 7～12
図版5　E地区の遺跡と遺物採集地点(1) …… 砂田作成 …… 7
図版6　E地区の遺物と遺物採集地点(2) …… 貫井作成 …… 7
図版7　E地区の遺物と遺物採集地点(3) …… 砂田作成 …… 7～8
図版8　E地区の遺物と遺物採集地点(4) …… 飯田作成 …… 8～9
図版9　E地区の遺物と遺物採集地点(5) …… 高橋作成 …… 9
図版10　E地区の遺物と遺物採集地点(6) …… 広瀬作成 …… 9
図版11　E地区の遺物と遺物採集地点(7) …… 宮川作成 …… 10
図版12　E地区の遺物と遺物採集地点(8) …… 真井田作成 …… 10
図版13　E地区の遺物と遺物採集地点(9) …… 真井田作成 …… 10
図版14　E地区の遺物と遺物採集地点(10) …… 磯村作成 …… 10
図版15　E地区の遺物と遺物採集地点(11) …… 荒木作成 …… 10
図版16　E地区の遺物と遺物採集地点(12) …… 渡辺作成 …… 10
図版17　E地区の遺物と遺物採集地点(13) …… 渡辺作成 …… 10
図版18　E地区の遺物と遺物採集地点(14) …… 遠野作成 …… 11

挿図目次

第1図　氷見市の地勢と地区割図 …… 宮川作成 …… 3
第2図　E地区図 …… 広瀬作成 …… 5
第3図　E地区地区割図 …… 佐々木・貫井作成 …… 6
第4図　E地区遺跡分布図 …… 佐々木・貫井作成 …… 6
第5図　縄紋遺物の散布状態 …… 佐々木・貫井作成 …… 14
第6図　弥生・古墳遺物の散布状態 …… 佐々木・貫井作成 …… 14
第7図　古代遺物の散布状態 …… 佐々木・貫井作成 …… 15
第8図　中世遺物の散布状態 …… 佐々木・貫井作成 …… 15
第9図　近世遺物の散布状態 …… 佐々木・貫井作成 …… 16
第10図　時期不明遺物の散布状態 …… 佐々木・貫井作成 …… 16

第1章　はじめに

1　調査の目的

氷見市が人の活動の舞台となったのは，現在知られている限りでは，今から約1万年前，上庄川11上流域の丘陵においてである。以後，遺跡は丘陵から海岸まで広く分布し，現在に至るまで連綿と人びとの営みが続いたものと思われる。

氷見市の遺跡の数は，大正7年（1918）の大境洞窟・朝日貝塚の発見以後，昭和47年（1972）の『富山県遺跡地図』では83個所，昭和58年（1983）の『氷見市遺跡地図』では143個所と，年々増加してきている。しかし，これらの成果は系統だった分布調査によるものではなく，その範囲・時期などについて不明な点が多く，また未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予測される。また近年の開発行為の増加に伴い，遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており，中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において，埋蔵文化財の保護と活用のため，また保護と開発との調整のため，基礎資料として遺跡地図の一層の充実が望まれたのである。

2　調査の経過

このような状況のもと，氷見市では平成4年度からスタートする第6次総合計画の主要施策のひとつとして，「指定文化財の再調査はもとより，指定以外の文化財，埋蔵文化財の調査・発掘及び資料の収集に努め，活力ある文化財として，郷土の歴史的遺産の保護・顕彰を図る」ことをあげ，主要事業のひとつに「遺跡地図の作成」をあげた。

これを受けて氷見市教育委員会では，平成4年度に昭和58年の『氷見市遺跡地図』発行後の新知見を加えた『氷見市遺跡地図』［第2版］を発行し，234個所の遺跡を登録した。さらに平成5年度からは，この遺跡地図をさらに充実させるため，国庫補助事業として市内遺跡詳細分布調査を実施することになった。

調査にあたっては，氷見市教育委員会を中心とし，富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て，下記の調査団を編成した。

調査の方針としては，市域の平野部全体を調査対象とし，7個年計画とすること，年度ごとに報告書を作成し，最終的にはより充実した遺跡地図を刊行することが決定された。

今年度の現地調査は，E地区について（第1図），1997年10月18日～11月8日までの間，計8日間，延170人余の参加を得て，実施した。　（大野 究）

氷見市埋蔵文化財分布調査団

団　　長：江幡　　武（氷見市教育委員会教育長）

調　査　員：宇野　隆夫（富山大学人文学部教授）

前川　　要（富山大学人文学部助教授）

鈴木　瑞麿（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

大野　　究（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

調査補助員：河合　　忍・稲石　純子・近藤　美紀・田中　幸生・山崎　雅恵

（富山大学大学院人文科学研究科学生）

中田　書矢・中谷　正和・浅野　良治・小野　　基・金成　淳一・小島あずさ

清水あゆみ・宿野　隆史・鈴木　悟嗣・鈴木　由紀・滝沢　　匡・戸田真美子

栃谷　朋子・野水　晃子・春名　理史・深田　亜紀・丸山　　浩・三浦　英俊

岡田　一広・小幡　鮎子・梶田亜友美・小松　博幸・後藤　　晋・佐々木建二

佐藤　　慎・須田　雅昭・高志こころ・高安　洋治・滝川　邦彦・戸簾　暢宏

中島　和哉・中野　秀昭・西村　倫子・早川さやか・三浦　知徳

（富山大学人文学部考古学研究室三・四年生）

調査協力者：荒木　慎也・飯田　良智・磯村　愛子・佐々木亮二・砂田　晋司・高橋　泰生

遠野いずみ・貫井　美鈴・廣瀬　直樹・真井田宏彰・宮川　俊輔・渡辺　　樹

（富山大学人文学部考古学研究室二年生）

阿部　　来・井出　靖夫・表原　孝好・片桐　清恵・加藤　美生・川端　良招

笹井　史生・清水　貴広・塚田　直哉・不嶋　美穂・的場　茂晃・八巻　謙司

山口　欧志

（富山大学人文学部考古学研究室一年生）

事　務　局：石崎　久男（氷見市教育委員会生涯学習課課長）

越田　　貢（氷見市教育委貝会生涯学習課課長代理）

屋敷　宗一（氷見市教育委員会生涯学習課文化係長）

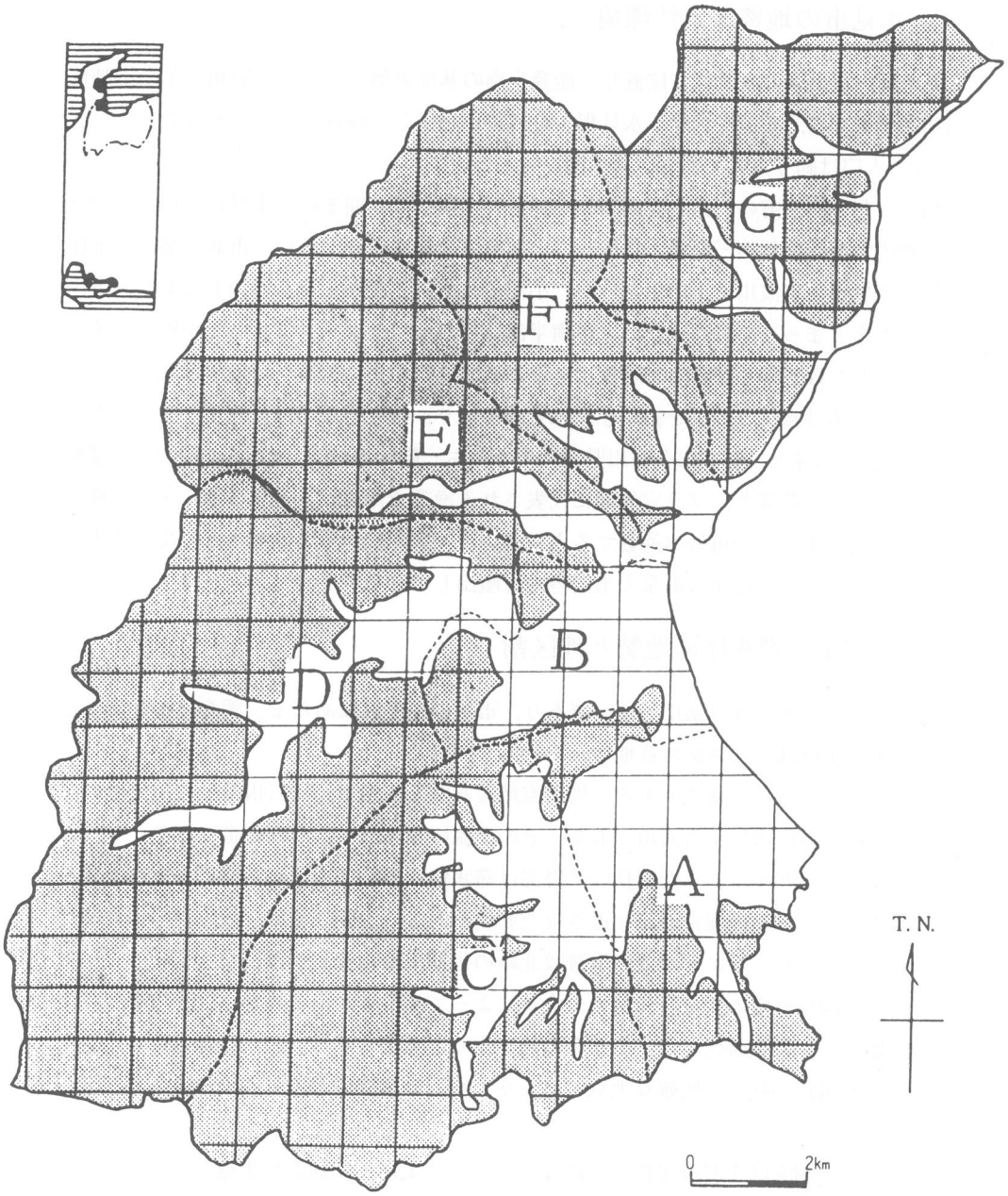
池田　幸代（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

坂本　研資（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

布尾　　誠（氷見市教育委員会生涯学習課主事）

小谷　　超（氷見市教育委員会生涯学習課主事）

（荒木慎也）



A地区	1993年度調査地区	E地区	1997年度調査地区
B地区	1994年度調査地区	F地区	1998年度調査予定地区
C地区	1995年度調査地区	G地区	1999年度調査予定地区
D地区	1996年度調査地区		

第1図　氷見市の地勢と地区割（国土座標X＝138°59′55″，Y＝35°48′を基準として）

3　氷見市の地勢と自然環境

氷見市は，富山県の西北部に位置し，能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに，太田村を除く氷見郡１町17村が合併し，現在の氷見市が成立した。面積は約230㎞，人口は約６万人である（第１図）。

市域は，北・西・南の三方が標高300～500ｍの丘陵に取り囲まれ，東側は富山湾に面している。丘陵の大部分は新第三紀層から成り，山間部では地すべりが多い。市北半部は，上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり，上庄川流域以外は，まとまった平野が少ない。市南半部は，かってラグーンであった平野と，その砂嘴として発達した砂丘からなる。市街地は，海岸線のほぼ中央に位置し，近年は北と南に広がりつつある。鉄道は氷見と高岡を結ぶＪＲ氷見線が通り，主要道路では高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道160号と，富山市と石川県羽咋市を結ぶ一般国道415号が通る。代表的な産業は，稲作を中心とした農業と，ブリ定置網に代表される漁業であるが，近年は第二・三次産業就業者が多く，高岡市などの市外へ通勤する人が多い。一方，口能登の観光地として，市内には旅館・民宿が建ち並び，近年は温泉も市内各地で噴出している。

4　1997年度調査区の地勢と地区割

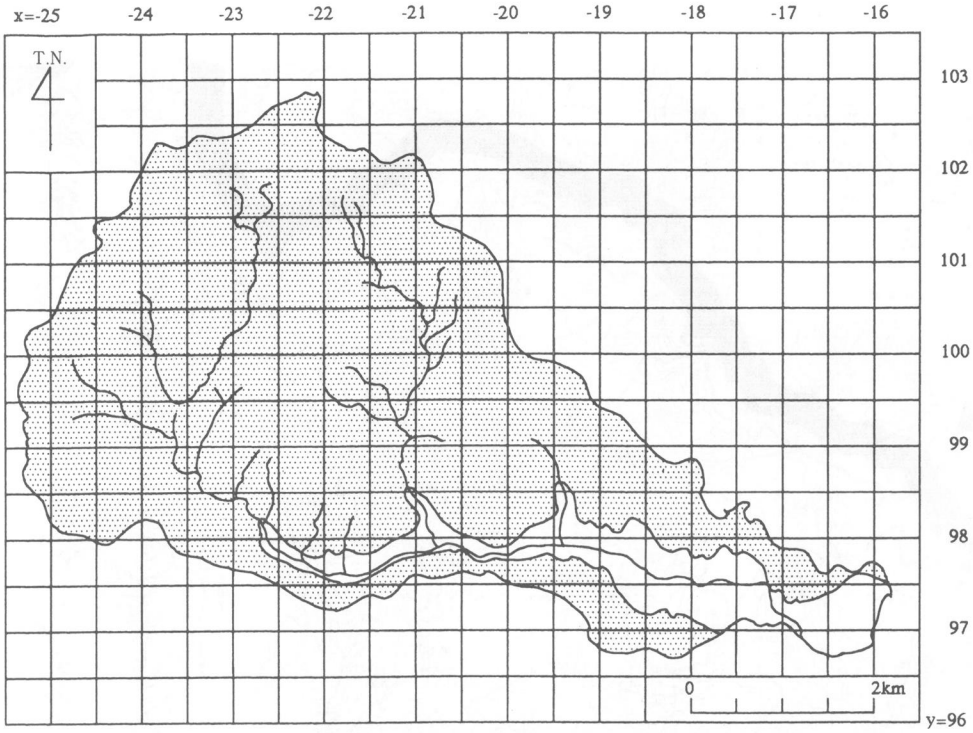
本年対象とするＥ地区は余川谷地区であり，市域の中央部にあたる。調査は踏査によるものとし，対象は平野部と丘陵部の農地とした（第２図）。

Ｅ地区は余川川とその支流である一刎川流域にあたる。余川川は石川県との境に近い山地に発し，約11㎞で富山湾に至る河川である。その上流の丘陵部は地滑り地帯であり，起伏の緩やかな所に集落が点在する。また細長い平野部は滞水性に乏しい山地から河川の流出が急激なため，堤防の決壊と水田の埋没が繰り返された歴史がある。丘陵部では，早くから縄紋時代の遺跡が発見されており，特に一刎前田遺跡は北陸の後期前葉の標式遺跡になっている。一方平野部については圃場整備の折などに地元の人達によって採集された遺物から，古墳時代後期頃から開発が始まり，奈良時代に入ってから本格化すると考えられる。余川谷地区は，氷見市のなかでは比較的遺跡の状況が明確な地域であるが，今回の調査によって，より詳しい状況を把握できるであろう。

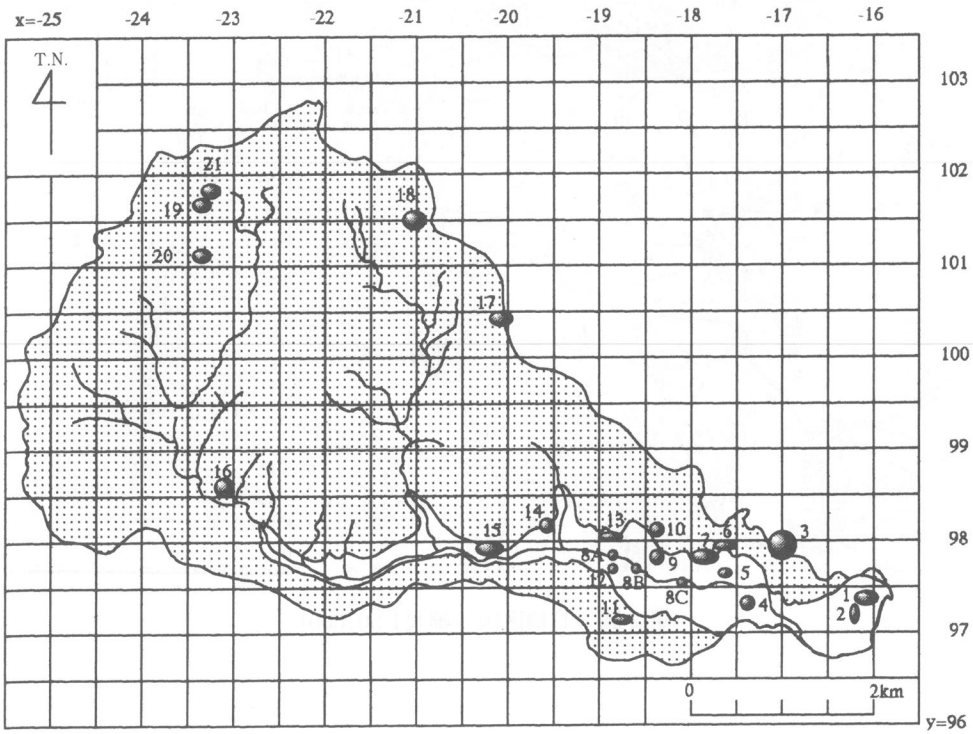
現地調査は，調査区を丘陵尾根，道路などによって大別・細別して実施した。そしてその結果を氷見市都市計画図座標に沿った一辺500ｍの方眼を単位として集計し（第３図），時期別の採集遺物量を図示して，遺跡の盛衰と立地の変化を把握する基礎資料とした（第５～８図）。

（大野　究）

第2図　E地区図（縮尺1/50,000）



第3図　E地区地区割図



第4図　E地区遺跡分布図（遺跡名は図版5～18参照）

第２章　分布調査の成果

１　遺跡と採集遺物（図版３・図版４）

(1)　阿尾島田Ａ遺跡（図版５の１，氷見市遺跡地図第２版88）氷見市阿尾字島田

本遺跡は余川川河口に広がる平野部の北端に位置し，標高は約４ｍを測る。遺跡の北東から西にかけては丘陵が広がっており，南東は約400ｍの距離をおいて海岸線に至る。1974年の圃場整備の折に須恵器・土師器が出土し，1992・1993年には国道バイパス工事に先立ち試掘・本調査が行われた。遺跡は奈良時代後半を中心とし，掘立柱建物８棟が確認されている。この他，縄紋時代晩期・中世の遺物も出土している。現在は遺跡の北西部を国道160号氷見バイパスが通っているが，その他は水田として利用されている。

今回の調査では縄紋土器一片と須恵器一片を採集した。

(2)　阿尾島田Ｂ遺跡（図版５の２，氷見市遺跡地図第２版110）氷見市阿尾字島田

本遺跡は余川川河口に広がる平野部の北端に位置し，北には約150ｍの距離をおいて阿尾島田Ａ遺跡が存在する。現在までに珠洲・土師器が出土しており時代は古墳・中世と考えられていたが，今回の調査において須恵器が採取されたため古代においても機能を果たしていた遺跡であることが新たに確認された。詳細については明確には分ってはいない。

今回の調査では須恵器２片と叩石１点を採取し，これを固示した。（図版３の１，２）

１は叩石であり，最大長6.6㎝，最大幅5.7㎝を測る。石材は花崗岩で，長円形を呈する。表裏両面に潰痕があり，周縁部に使用痕がある。

２は須恵器の甕の体部であり，８～９世紀のものである。外面には擬格子の叩き目を残し，内面には同心円紋の当具痕を残す。胎土は密であり，色調はオリーブ灰色を呈する。焼成は不良である。　（砂田晋司）

(3)　稲積城跡（図版６の３，氷見市遺跡地図第２版29）氷見市稲積城が峯

本城跡は余川川下流左岸の標高約98ｍの山上に築かれた山城である。観応３年（1352）越中で幕府に背いた桃井直信の拠点の一つである三角山城の推定地とされるが詳細は不明である。

今回の調査も含めて遺物は採集できなかった。　（高橋泰生）

(4)　稲積前田遺跡（図版７の４，氷見市遺跡地図第２版99）氷見市稲積字前田

本遺跡は余川川下流域南岸の平地に位置し，北東・南西方向には約400ｍの距離をおいて丘陵に至る。現在までに須恵器・土師器・管玉が採取されており，古墳から古代にかけての遺跡であることが確認されている。

今回の調査では遺物は採集できなかった。　（砂田晋司）

(5)　稲積西ケ谷内遺跡（図版７の５，氷見市遺跡地図第２版70）稲積字西ヶ谷内

本遺跡は，余川川下流左岸の平野，標高６～８ｍの地点に立地し，上稲積遺跡の北側に所在

する。現在は水田として利用されている。1977年に，圃場整備中に，地下１ｍから土師器，須恵器，灰釉陶器を出土している。採集された遺物から，本遺跡は８世紀代を中心としていることが確認されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(6) 稲積後池遺跡（図版７の６，氷見市遺跡地図第２版93）稲積字西ヶ谷内

本遺跡は，余川川右岸，標高約13ｍの地点に所在する。現在はため池となっている。1983年10月に行われた池改修工事の折，縄紋土器，土師器，須恵器，珠洲を出土している。今回の調査では，須恵器18片を採集し，そのうち６片を図示した（図版３の６～10，12）。

４は須恵器の杯Ａの蓋の端部である。時期は７世紀末葉～８世紀初頭のものである。口径は約13㎝を測り，口縁部の残存率は0.5/12である。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

５は須恵器の蓋の端部である。口径は約17㎝を測る。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

６は須恵器の杯の底部である。底径は約８㎝を測る。胎土は密であり，色調は淡灰色を呈する。焼成は良好である。

７は須恵器の杯の底部である。底径は約９㎝を測る。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

８は須恵器の甕の体部で，時期は９世紀後半のものである。外面に格子状の叩き目を残す。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

９は須恵器の甕の体部である。外面に平行叩き目と掻目を残し，内面に当て具痕を残す。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好である。（飯田良智）

今回の調査より，遺跡範囲が北方向に100ｍ拡大することが確認された。

(7) 余川親ケ谷内遺跡（図版７の７，氷見市遺跡地図第２版102）氷見市吉川字親ケ谷内

余川川下流左岸のやや奥まった谷に立地し上稲積集落の北面に所在する。標高は約16ｍであり，現在は水田である。過去に須恵器が整理箱一箱分採集されている。

時期の推定できる遺物としては田辺編年のMT-15型式に比定でき，実年代は６世紀前半頃があてられる杯身，TK-209に比定でき，実年代は７世紀初頭頃があてられる杯身がある。その他の須恵器は８世紀代のものと考えられる（氷見市立博物館 1989）。

今回の調査では須恵器杯一片を採集した。

(8) 余川川河床遺跡（図版７の８，８の８，氷見市遺跡地図第２版118）余川

余川川川底の３ヵ所の地点から遺物が出土している（Ａ～Ｃ地点）。Ａ，Ｂ地点の遺物は氷見市立博物館で保管されておりＣ地点の遺物は現在所在不明である。いずれも出土の時期・状況は不明である。Ａ地点からは，須恵器・土師器細片・珠洲が採集されている。Ｂ地点からは須恵器１点が採集されている。このように，古墳時代・古代・中世の遺物が出土しているが詳細は不明である（氷見市立博物館 1989）。

今回の調査では遺物は採集できなかった。

(9) **余川海老田遺跡**（図版８の９，氷見市遺跡地図第２版103）氷見市余川字松木

余川川左岸の丘陵近くの水田，標高約13ｍの地点に所在する。過去に古代の須恵器・土師器・木片・炉石が採集されている。

時期の推定できる遺物としては７世紀前半頃（飛鳥時代後期）に比定される須恵器杯Ａの蓋，10世紀前半頃（平安時代）に比定される土師器椀があり，残りの遺物は奈良時代を中心とした７世紀末～９世紀初頭頃のものであると思われる（氷見市立博物館 1989）。

今回の調査では遺物は採集できなかった。（廣瀬直樹）

(10) **余川古寺谷内遺跡**（図版９の10，氷見遺跡地図第２版104）余川字田地

余川川の左岸の丘陵，標高30～40ｍの地点に位置する。遺跡は中世に区分され，現在は針葉樹林や果樹園が広がっている。

今回の調査では遺物は採集できなかった。

(11) **余川寺ヶ谷内遺跡**（図版８の11，氷見遺跡地図第２版47）余川字寺ヶ谷内

余川川右岸の谷の奥，標高25ｍ前後の地点に所在する古墳・古代・中世・近世にまたがる遺跡である。現在は水田となっている。明治末の開墾のおりに，谷から出土した遺物を一度捨てられており，その後の耕作に伴って出土したものが過去に採集されている。遺物としては須恵器・土師器・珠洲・越中瀬戸・唐津系陶器・伊万里系磁器が採集されている。

今回の調査では遺物は採集できなかった。

(12) **余川片畑遺跡**（図版８の12，氷見遺跡地図第２版38）余川字片畑

遺跡は余川川右岸の標高約11ｍの地点に位置し，余川小学校の北東に所在する。現在は水田である。昭和49年９月23日に須恵器・土師器が若干量採集されたが，出土状況は不明である。遺物の量が少なく，詳細不明であるが古墳時代に区分されている。

今回の調査では遺物は採集できなかった。（宮川俊輔）

(13) **余川善名遺跡**（図版９の13，氷見市遺跡地図第２版209）氷見市余川

本遺跡は余川川左岸に位置し，標高は約10ｍを測る。これまでに珠洲が採集されているが，遺跡の詳細は不明である（氷見市立博物館 1989）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では珠洲一片を採集し，これを図示した（図版３の17）。

11は珠洲甕の体部であり，吉岡康暢氏による珠洲Ⅳ期（吉岡 1994）（14世紀）のものである。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

(14) **余川谷村遺跡**（図版10の14，氷見市遺跡地図第２版123）氷見市余川谷村

本遺跡は余川川左岸に位置し，標高は約10ｍを測る。これまで採集されている遺物は，須恵器・土師器・珠洲・伊万里系磁器であるが，遺物が少なく遺跡の詳細は不明である（氷見市立博物館 1989）。現在は水田・畑として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（真井田宏彰）

⑮ **余川市谷遺跡**（図版11の15，氷見市遺跡地図第２版119）氷見市余川市谷

本遺跡は，余川川左岸の標高14ｍの狭い平野に位置する。この平野は谷口に立地する。過去に，出土の時期・状況は不明であるが，須恵器，珠洲が若干採集されており，古代･中世の遺跡として知られていた（氷見市立博物館 1989）。

今回の調査において採集した遺物は，青磁１片と須恵器３片である。そのうち青磁１片を図示した（図版３の19）。

10は青磁の椀の体部であり，14世紀代の龍泉窯のものである。外面に蓮弁紋を施している。胎土は密であり，釉調は灰オリーブ色を呈する。焼成は良好である。

本遺跡は従来は約125ｍ四方に広がっていたが，今回の調査により全体に125ｍ程範囲を拡大することを確認した。

⑯ **一の瀬遺跡**（図版15の16，氷見市遺跡地図第２版29）氷見市一ノ瀬番場

本遺跡は，碁石ケ峰（461.1ｍ）を主峰とする碁石山地の中で，余川川に沿って南東に傾斜した台地上に位置する。標高は40ｍを測る。この台地の西は碁石ケ峰を仰ぎ，東西方向には，鎮守の森の彼方に余川方面の出々を眺め渡すことができる。過去に加曽利Ｂ式併行のものと考えられる後期縄紋土器が出土している。現在は水田として利用されている（氷見高校歴史クラブ 1964）。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

⑰ **柴峠城**（図版16の17，氷見市遺跡地図第２版233）氷見市余川，一刎・吉滝

本遺跡は，余川川中流の標高276.1ｍの山上に位置する。昔は能越連絡の重要路線であり，ここから山の尾根づたいに稲積へ出る道がわずかに残っている。能登から進攻してきて氷見湊を攻撃しようとする者にとって，ここは極めて重要な拠点であった（氷見市史編修委員会 1963）。観応３年（1352）越中の桃井直常討伐を足利尊氏に命ぜられた能登守護吉見氏頼が陣をしき，桃井勢を打ち破った「余川保芝塔下」のことである。

今回の調査では遺物を採集できなかった。　（渡辺　樹）

⑱ **一刎前田遺跡**（図版17の18，氷見市遺跡地図第２版15）氷見市一刎字前田

本遺跡は標高461.1ｍを測る碁石ケ峰が西方に向かって緩やかに傾斜している山腹に立地し，一刎小学校の北方700ｍに所在する。標高は約240ｍを測る。現在は水田や畑として利用されている。1955・1962年に氷見高校歴史クラブにより調査されており，玦状耳飾り片１個，石斧，石鏃，縄紋土器が出土している。これらの遺物から，縄紋時代中期末から後期を中心とした遺跡と推定されている（氷見高等学校歴史クラブ 1964）。

今回の調査では剝片石器１点，珠洲１片，越中瀬戸１片を採取し，そのうち越中瀬戸を図示した（図版13の23）。

９は越中瀬戸の皿の底部である。底径は４㎝を測る。胎土はやや密で，色調は淡黄色を呈する。焼成は良好である。

⑲ **懸札上ノ前遺跡**（図版18の19，氷見市遺跡地図第２版16）氷見市懸札字上ノ前

本遺跡は，標高461.1ｍを測る碁石ケ峰が西方に向かって緩やかに傾斜している山腹に立地し，剱之神社の北西約600ｍに所在する。標高は約300ｍを測る。現在は畑として利用されている。1963年に氷見高校歴史クラブにより調査されたが，遺物は採集されなかった（氷見高等学校歴史クラブ 1964）。なお本遺跡出土と伝えられる縄紋土器が富山県立氷見高等学校に保管されている。時期は中期後半のものであり，加曽利Ｅ式併行とされている。

今回の調査では遺物は採取できなかった。

⑳ **懸札宮が谷内遺跡**（図版18の20，氷見市遺跡地図第２版17）氷見市懸札字宮が谷内

本遺跡は標高461.1ｍを測る碁石ケ峰が西方に向かって緩やかに傾斜している山腹に立地し，剱之神社の西方約400ｍに所在する。標高は約230ｍを測る。現在は畑として利用されている。これまでに石斧数個，石鏃１個，縄紋土器が多数採集されている。これらの遺物から，縄紋時代中期末から後期にかけての遺跡と推定されている。

今回の調査では遺物は採取できなかった。

㉑ **懸札ホウシバラ遺跡**（図版18の21，氷見市遺跡地図第２版220）氷見市懸札

本遺跡は標高461.1ｍを測る碁石ケ峰が西方に向かって緩やかに傾斜している山腹に立地し，剱之神社の北西約600ｍに所在する。標高は約310ｍを測る。現在は水田や畑，果樹園として利用されている。これまでに縄紋時代中期，後期後葉から晩期前葉の土器，磨製石斧，奈良時代から平安時代の須恵器が採集されている。

今回の調査では遺物は採取できなかった。　（荒木慎也）

㉒ **その他の採集遺物**

本調査では，遺跡として設定した地区外の採集品についても，将来的な遺跡発見の可能性を高めるため，すべて採集地点を記録・報告している（図版５～18）。これらの内，主なものについて示す（図版３の12～24）。

12は縄紋土器であり縄紋時代中期末の前田式のものと考えられる。外面にＲＬ縄紋を施し，内面に撫で調整を施す。胎土は粗であり，色調は明黄褐色を呈す。焼成は不良である（ｘ＝－24，ｙ＝101）。

13は須恵器の蓋の端部であり９世紀後半のものである。口径は約14㎝を測る。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好である（ｘ＝－17.5，ｙ＝97.5）。

14は須恵器の長頸壷の高台であり，８世紀後半～９世紀初頭のものである。底径は10㎝を測る。胎土は密であり，１～２㎜の砂礫を含んでいる。色調は青灰色を呈す。焼成は良好であり，還元硬質である（ｘ＝－17.5，ｙ＝97）。

15は青磁の皿の底部である。底径は8.4㎝を測る。胎土は密であり，色調は明緑灰色を呈す。焼成は良好である（ｘ＝－22，ｙ＝98.5）。

16は古瀬戸の香炉の底部である。内外面に撫で調整を施す。胎土は密であり，胎土の色調は浅黄色を呈す。釉調は明黄褐色を呈す。焼成は良好である（ｘ＝－18.5，ｙ＝97）。

17は珠洲の壷・甕類の体部であり，時期は珠洲Ⅳ期（14世紀）のものである。外面に平行叩き目を残す。胎土は粗であり，色調は灰色を呈する。焼成はやや良好である（x＝－17，y＝97）。

18は珠洲の壷・甕類の体部であり，珠洲Ⅳ期のものである。内面に当具痕を残し，外面に叩目を残す。胎土は粗であり，色調は灰色を呈す。焼成はやや良好である（x＝－21.5，y＝97.5）。

19は珠洲の壷・甕類の体部であり，時期は珠洲Ⅲ～Ⅳ期（13～14世紀）のものである。外面に平行叩き目を施し，内面に当具痕を有する。胎土は密であり，色調は灰黄色を呈する。焼成は不良である（x＝－17.5，y＝97）。

20は瓦器の香炉の口縁部であり，16世紀頃のものである。口径は18cmを測る。胎土は密であり，色調は灰黄色を呈す。内外面に撫で調整を施す（x＝－19.5，y＝98）。

21は近世陶器の鉢の口縁部である。口径は約21cmを測る。胎土は密であり，色調は暗褐色を呈す。焼成は良好である（x＝－17.5，y＝97.5）。

22は伊万里の椀の口縁部である。口径は12cmを測る。胎土は密であり，色調は明緑灰色を呈す。焼成は良好である（x＝－21.5，y＝97.5）。

23は近世磁器の碗の底部である。底径は約5.4cmを測る。胎土は密であり，色調は白色である。焼成は良好である（x＝－17.5，y＝97.5）。

24は越前の甕の体部である。底径は約16cmを測る。外面の下部に約3cm幅の押圧突帯を施している。胎土は密であり，胎土中に砂粒を含む。色調は灰色を呈し焼成は良好である（x＝－16，y＝97）。

（磯村愛子・遠野いずみ）

2　遺物の散布状態

本年度対象としたＥ地区は，余川谷地区であり，市域の中央部にあたる。採集した遺物は縄紋時代から近世にいたる91破片・口縁部0.823個体分である。遺跡および遺物採集地点の詳細は，前節において述べている。

本節では，これらの採集資料を歴史資料として活用するために，時期別に大別・計算し，その散布状態の傾向について示すことにする。時期別の総量は，縄紋時代は４片，弥生時代が１片，古墳時代が１片，古代が45片・0.224個体分，中世が14片・0.125個体分，近世が22片・0.474個体分である。

なお本年度調査地区は氷見市都市計画座標にあわせて国土座標Ｘ＝138°59′55″，Ｙ＝35°48′を原点とする１辺500ｍの方眼を設定し，その南東角の座標を地区名としている。

(1)　縄紋時代遺物の散布状態（第５図）

縄紋時代の遺物は，土器４片と叩石１点を４地区から採集した。

Ｅ地区の縄紋時代の遺跡は調査区北西部端の丘陵部および富山湾付近の平野部に立地し，遺物も同様に散布している。

(2)　弥生・古墳時代遺物の散布状態（第６図）

弥生・古墳時代の遺物は，土器２片を２地区から採集した。

弥生時代の遺跡は，今回の調査区においては確認されておらず，古墳時代の遺跡も平野部に若干見られるのみである。

(3)　古代遺物の散布状態（第７図）

古代の遺物は，須恵器45片・0.224個体分を13地区から採集した。

遺物の採集量は他の時代よりも多く，余川川中流から下流に沿って広がる平野部に散布している。特に，ｘ＝－17.5，ｙ＝97.5およびｘ＝－18，ｙ＝97.5地区を中心とする稲積後池遺跡において28片と，多くの遺物を採集している。

(4)　中世遺物の散布状態（第８図）

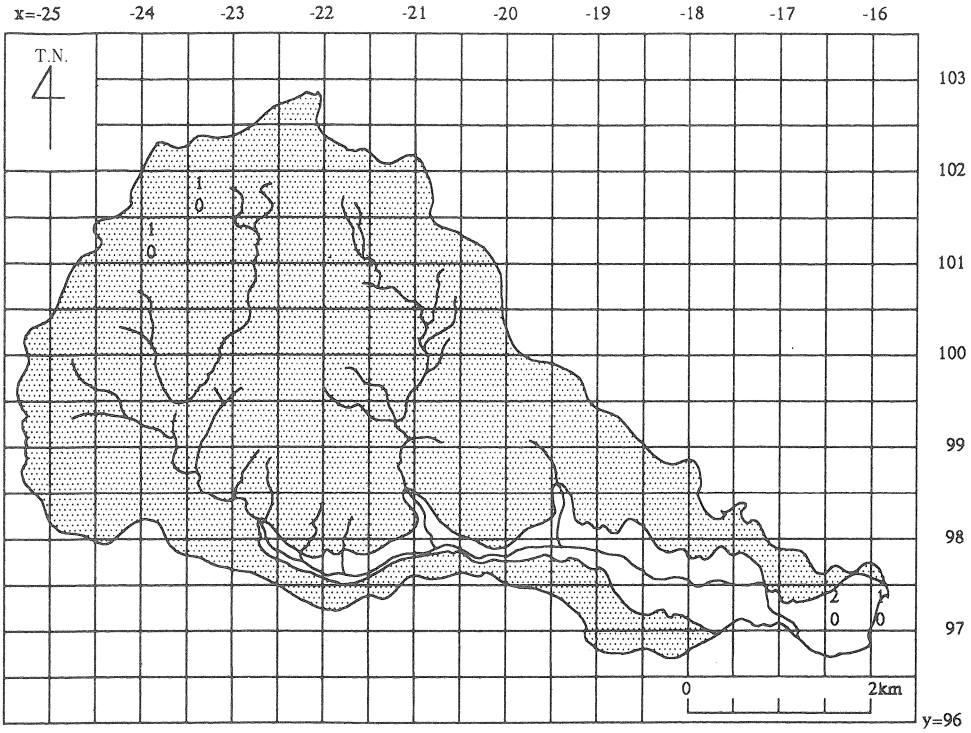
中世の遺物は，珠洲８片，瓦器１片・0.125個体分，古瀬戸１片，中世陶器１片，青磁２片，白磁１片を11地区から採集した。

この時代の遺物は少数であったが，古代の採集遺物が平野部のみに散布するのに比べ，調査区北部の丘陵にも見られるようになる。こうした遺物の分布は，中世において本地区にいくつかの山城が築かれ，丘陵部も利用されるようになったことを示すものであろう。

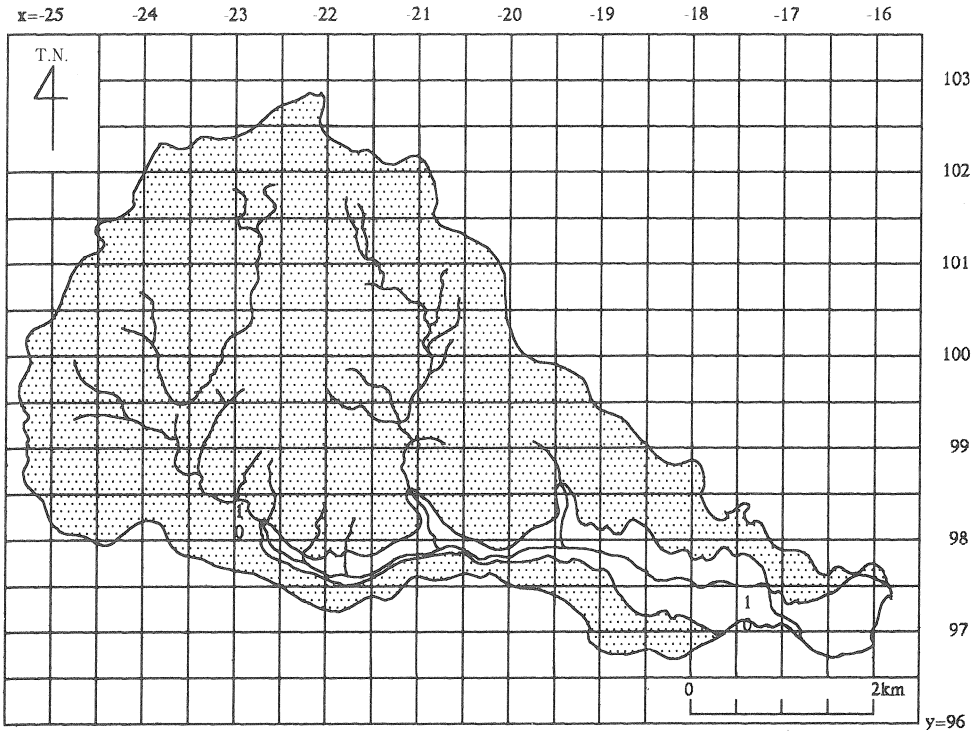
(5)　近世遺物の散布状態（第９図）

近世の遺物は，越前１片，越中瀬戸１片，唐津２片，近世陶器14片・0.474個体分，伊万里２片，近世磁器２片を12地区から採集した。

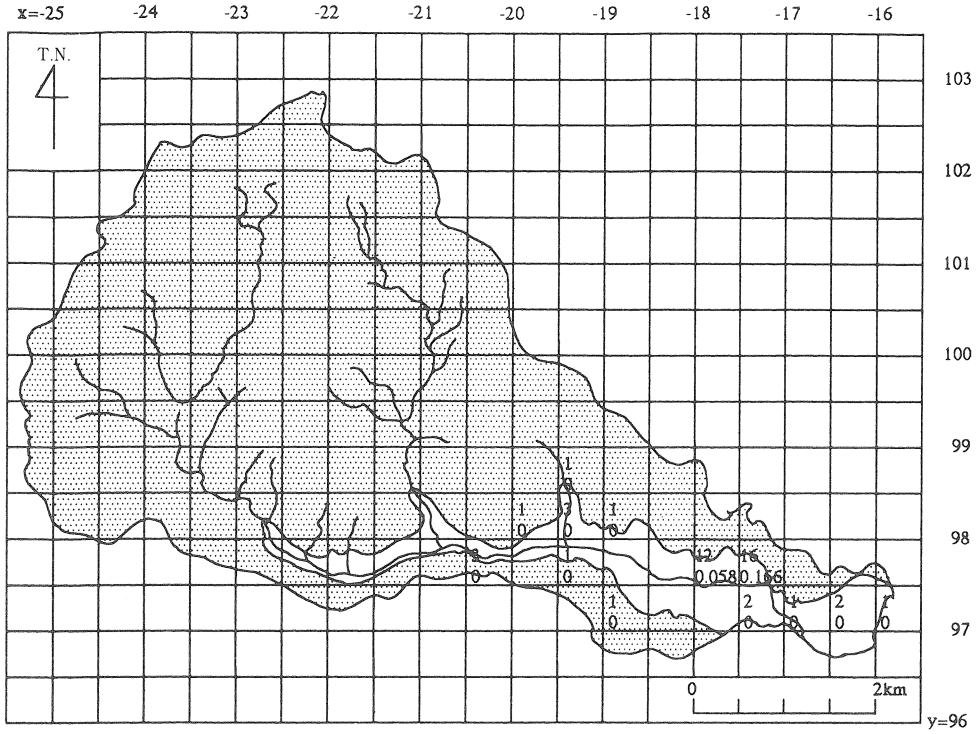
この時代の遺物の分布状態は中世とほぼ同様であるが，前時代よりも出土量が増加し，その範囲は北西の山岳部の谷裾まで広がる。



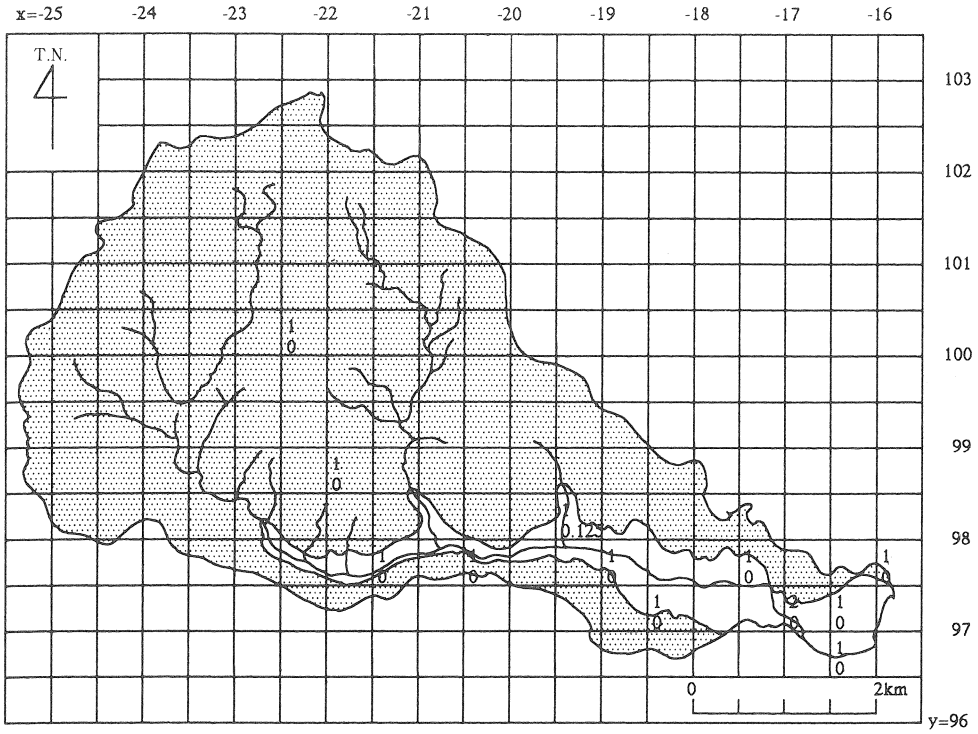
第5図　縄紋時代遺物の散布状態（上段：破片数，下段：口縁部個体数）



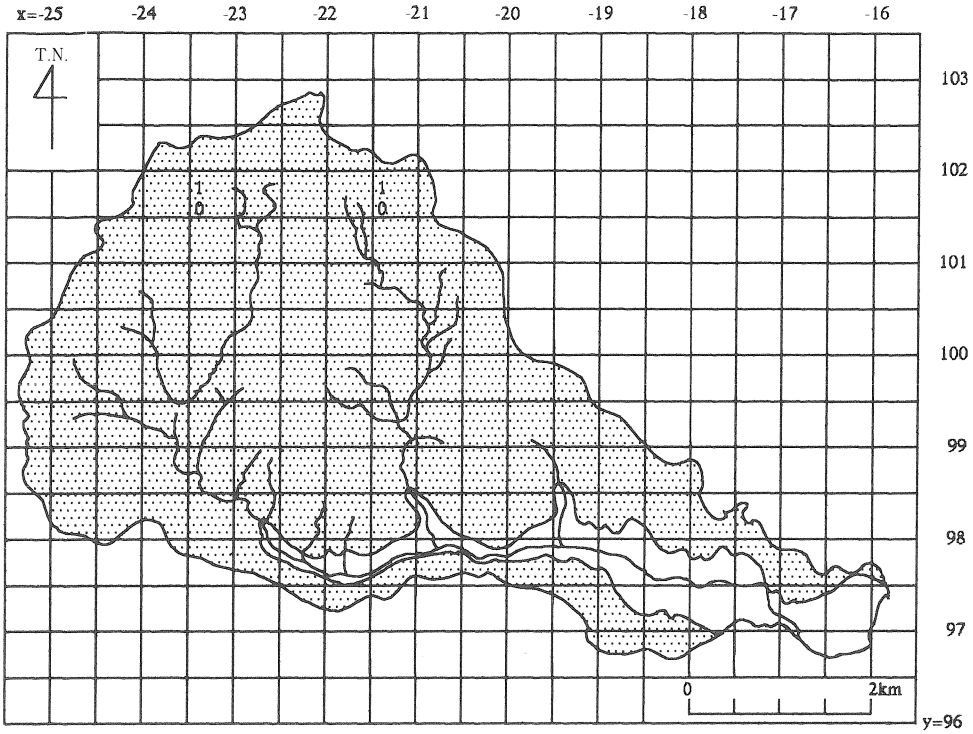
第6図　弥生・古墳時代遺物の散布状態（上段：個体数，下段：口縁部個体数）



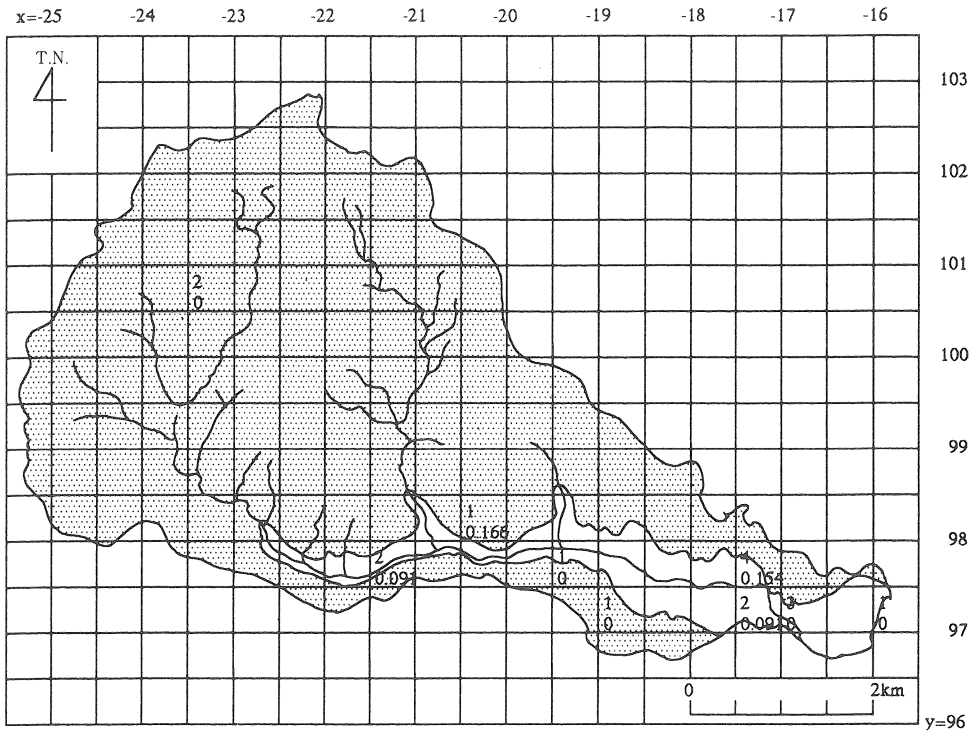
第7図　古代遺物の散布状態（上段：個体数，下段：口縁部個体数）



第8図　中世遺物の散布状態（上段：破片数，下段：口縁部個体数）



第９図　近世遺物の散布状態（上段：破片数，下段：口縁部個体数）



第10図　時期不明遺物の散布状態（上段：個体数，下段：口縁部個体数）

また海岸方面に唐津，伊万里などの遺物が多く分布するようになる。これは近世の当該地域の人々が広域にわたり活発に活動しはじめたことを反映したものといえるであろう。

(6) 小　結

各時期の遺物の散布状態は以上の通りであり，まとめると以下のようになる。

本地区の遺跡の分布は丘陵部では縄紋遺跡が多く，平野部・丘陵部裾では古墳時代から近世までの各時期の遺跡が集中している。

縄紋時代の遺跡は丘陵部では一刎前田遺跡に代表されるように，中期末頃から出現する。平野部でも後晩期から遺跡が出現し始める。弥生・古墳時代の遺跡は若干分布はしているが，遺跡の詳細は分かっていない。

古代になると平野部及び，丘陵部裾に遺跡の分布が広がる。これは平野部が古墳時代後期から徐々に開発され始め，奈良時代に入って本格化したとされるこれまでの知見を裏付けるものである（氷見市立博物館 1987他）。

中世は古代に比べ出土量が少ない。また平野部では出土遺物が減るが，反面，丘陵上にまで遺物の分布が認められるようになる。このことから，本地区がこの時期，能越をつなぐ重要な路線として捉らえられ，山城が築かれるなど，主に軍事拠点として利用された様子を窺うことができる（氷見市史編修委員会 1963）。

近世は遺物が丘陵から平野部まで広く均等に分布している。これは，本地区での人々の生活活動が活発化し，生活活動域が広がったことを示すものであろう。（佐々木亮二・貫井美鈴）

第３章　おわりに

1997年度のＥ地区遺跡詳細分布調査において，91破片，口縁部0.823個体分の資料を採集し，５個年の調査採集遺物の総量は，4130片，23.964個体分となった。Ｅ地区の遺跡総数は，21である。今回の調査では，新しい遺跡は確認していない。

Ｅ地区は，氷見市の中央部にあたり，能登半島の宝達丘陵に連なる碁石山地，海老ヶ峰から舌状に伸びた２つの丘陵に挟まれた余川川とその支流である一刎川流域である。両岸には，弱く河岸段丘や自然堤防が発達し，谷口には過去の何度かの地滑り，洪水により扇状地的基盤が形成されている。本年度の成果については，前章において述べているので，以下それぞれの遺物散布，遺跡分布の概要を述べていこう。

なお現在の知見では，氷見市の平野部は，縄紋時代早期～前期には，ほとんどが内湾であったが，縄紋時代中期，後・晩期には潟湖となり，弥生時代以後，海と遮断され湖となり，その後徐々に沖積が進行していったとされている。但し，こうした古地理の正確な復元にはまだ未解決の問題も多く残されているという（藤田 1983）。

余川川流域では，縄紋時代前期から遺跡が確認されている。前期の遺跡は，海岸の砂丘列上で見つかっており，今回の調査でも遺物の散布がみられた。中期には砂丘に遺跡は確認されず，多くの遺跡が碁石山地の標高230～300ｍの南東方向に開けた台地上を好んで選地している。縄紋後期～晩期にも，台地を好んで選地するが，より標高の低い谷口に移動してきている。また海岸の砂丘上にも再び遺跡が営まれるようになり，海産資源の積極的な利用が始まったことが窺われる。氷見地域は，海岸から人の活動が始まっており（氷見市立博物館 1989，氷見市教育委員会 1994･1995），本調査区もその例外ではない。

弥生時代，古墳時代の遺物はほとんど採集されていないが，余川川南側の蛭古山にわずかに遺物の散布が確認された。この蛭古山には，加納蛭子山古墳群及び横穴古墳群としては富山県最大の加納蛭子山横穴古墳が存在している（岡本 1984）。この他，余川川下流域の平野部，丘陵上に古墳時代後期から遺跡が営まれるようになるが，丘陵上に営まれた遺跡を除き，平野部の遺跡は短期間で消滅する。余川川流域が本格的に開発され始めるのは，古代からである。

古代の遺物は，今回の調査で最も多く採集されている。周知の遺跡のほとんどが余川川下流の谷を見降ろす丘陵部裾及び谷口に立地している。また蛭子山周辺には，かつて律令期の条里区画が存在していたことが文献などで確認されており，下流域に人の開発が進められた様子がみてとれる。1996年度調査区であった上庄川流域も採集資料から，同時期に，同様な開発が進行したと結論されており，氷見地域全体の古代の様相として捉えることができるであろう。しかしこのような現象が通常の開発に伴うものであったのか，なんらかの政治的な背景が存在していたかは現状況では判断できない。

中世には，遺物は川沿いに下流域から上流域へと散布範囲を広げる。採集された遺物には，

中国製陶磁器，珠洲陶器など様々な流通品が増加する。周知の遺跡はすべて平野を臨む丘陵上に立地し，また丘陵上及び海岸平野を俯観する丘陵部裾には南北朝時代から戦国期にかけて多くの山城が築かれる。文献史の研究によれば13世紀には余川14ヵ村は余川保として再編され余川流域の開発が再開されており，余川谷中心部には市が立ったといわれている。また余川谷は能登と越中を繋ぐルートの境界にあたることから，戦略上重要な位置を占めていたとされ，余川谷を舞台とした多くの戦いの記録も残されている（氷見高校歴史クラブ 1961，児島 1976）。

近世は中世より遺物の散布域は拡大する。遺跡数は全体的に減少しているが，この時代，開発が奨励され，海岸部では塩の生産も行われたという（児島 1978）。海岸部は，今回の調査では，僅かしか資料が採集されず，将来遺跡が発見される可能性もあるが，圃場整備により，消滅した可能性もある。

今回の調査では，発見される遺物，遺跡に偏りがあり，特に弥生時代に関する資料はほとんど見つからず，次の古墳時代後期以後に開発が活発化するまでの様相が明らかでない。また余川谷低地，海岸部の資料が少なく多くの空白域が残されている。余川川の氾濫堆積物によって遺跡が埋没してしまった可能性もあるが，こうした０ｍ地帯に存在する遺跡の把握も含め，より詳細な地域の様相を明らかにすることで，氷見地域が時々の社会の動向といかに関わりながら発展を遂げていったのかを考える足掛りとしていきたい。

（田中幸生・山崎雅恵・宇野隆夫・前川 要・大野 究）

参考文献

大野 究 1987「稲積西ヶ谷内遺跡出土遺物」『氷見市立博物館年報―第6号―』氷見市立博物館

大野 究 1989「余川川流域の遺跡資料」『氷見市立博物館年報―第8号―』氷見市立博物館

児島清文 1976「第3編 村の歴史」『余川の歩み』

児島清文 1978「第2章 郷土のあゆみ」『稲積教育百年』

高岡 徹 1990「氷見南部地域における中世山城とその性格」『富山市日本海文化研究所紀要』第4号

富山県立氷見高校歴史クラブ 1961『故郷の城址』

富山県立氷見高校歴史クラブ 1964『富山県氷見地方 考古学遺跡と遺物』

氷見市史編修委員会 1963『氷見市史』

氷見市教育委員会 1980『富山県氷見市 鞍川金谷包含地 一の瀬包含地調査概報』

氷見市教育委員会 1990『一般国道160号氷見バイパス埋蔵文化財試掘調査報告』Ⅰ，氷見市埋蔵文化財調査報告第11冊

氷見市教育委員会 1991『一般国道160号氷見バイパス埋蔵文化財試掘調査報告』Ⅱ，氷見市埋蔵文化財調査報告第12冊

氷見市教育委員会・氷見市立博物館 1989『氷見市遺跡地図』氷見市文化財所在地図No.1

氷見市教育委員会 1993『氷見市遺跡地図［第2版］』氷見市埋蔵文化財調査報告書第14冊

氷見市教育委員会 1993『氷見市埋蔵文化財分布調査報告』Ⅰ，氷見市埋蔵文化財調査報告書第16冊

氷見市教育委員会 1994『氷見市埋蔵文化財分布調査報告』Ⅱ，氷見市埋蔵文化財調査報告書第17冊

氷見市教育委員会 1995『氷見市埋蔵文化財分布調査報告』Ⅲ，氷見市埋蔵文化財調査報告書第20冊

氷見市教育委員会 1996『氷見バイパス関連遺跡調査報告』Ⅳ，氷見市埋蔵文化財調査報告書第22冊

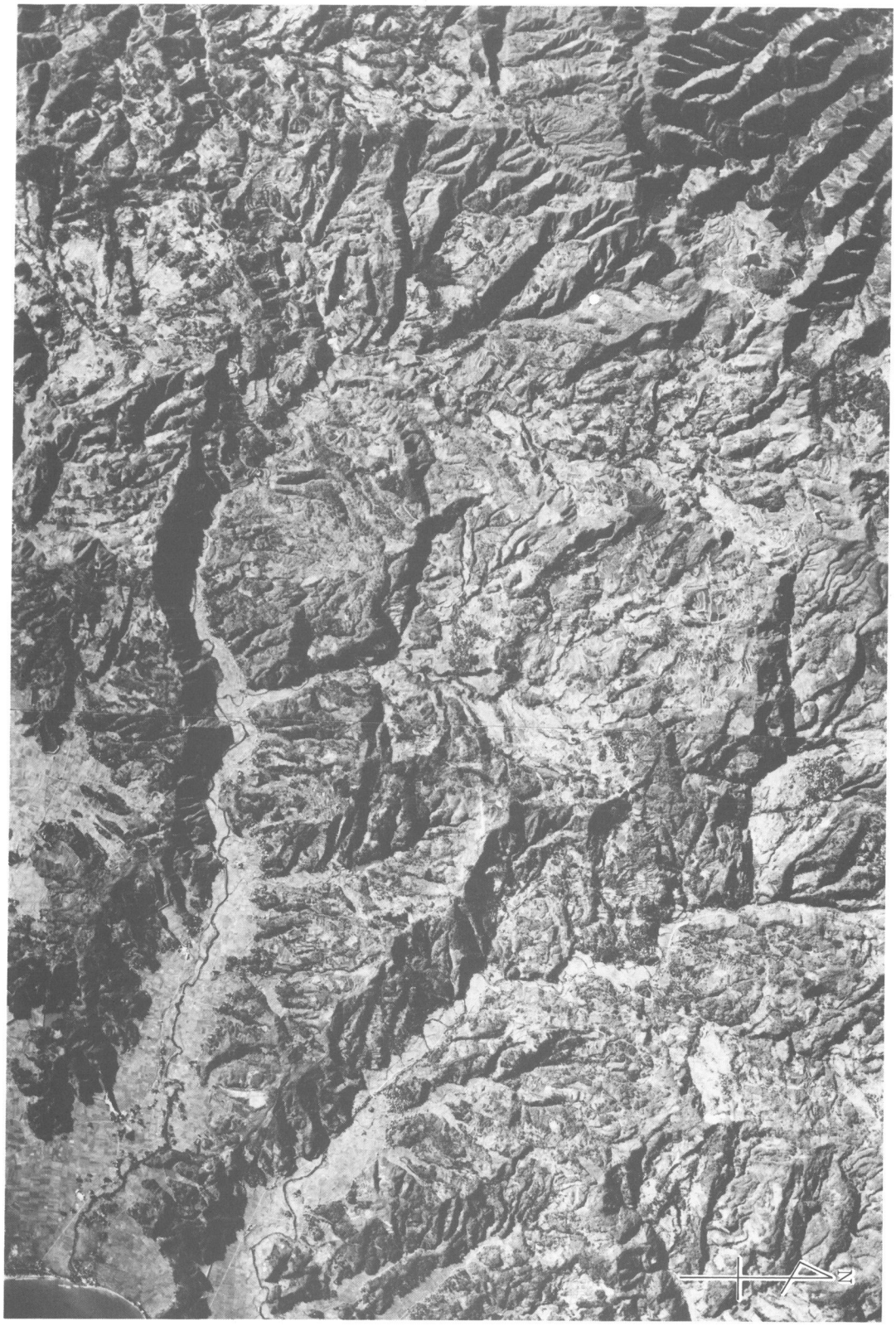
氷見市教育委員会 1997『氷見市埋蔵文化財分布調査報告』Ⅴ，氷見市埋蔵文化財調査報告書第23冊

藤田富士夫 1983『富山』日本の古代遺跡13 保育社

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

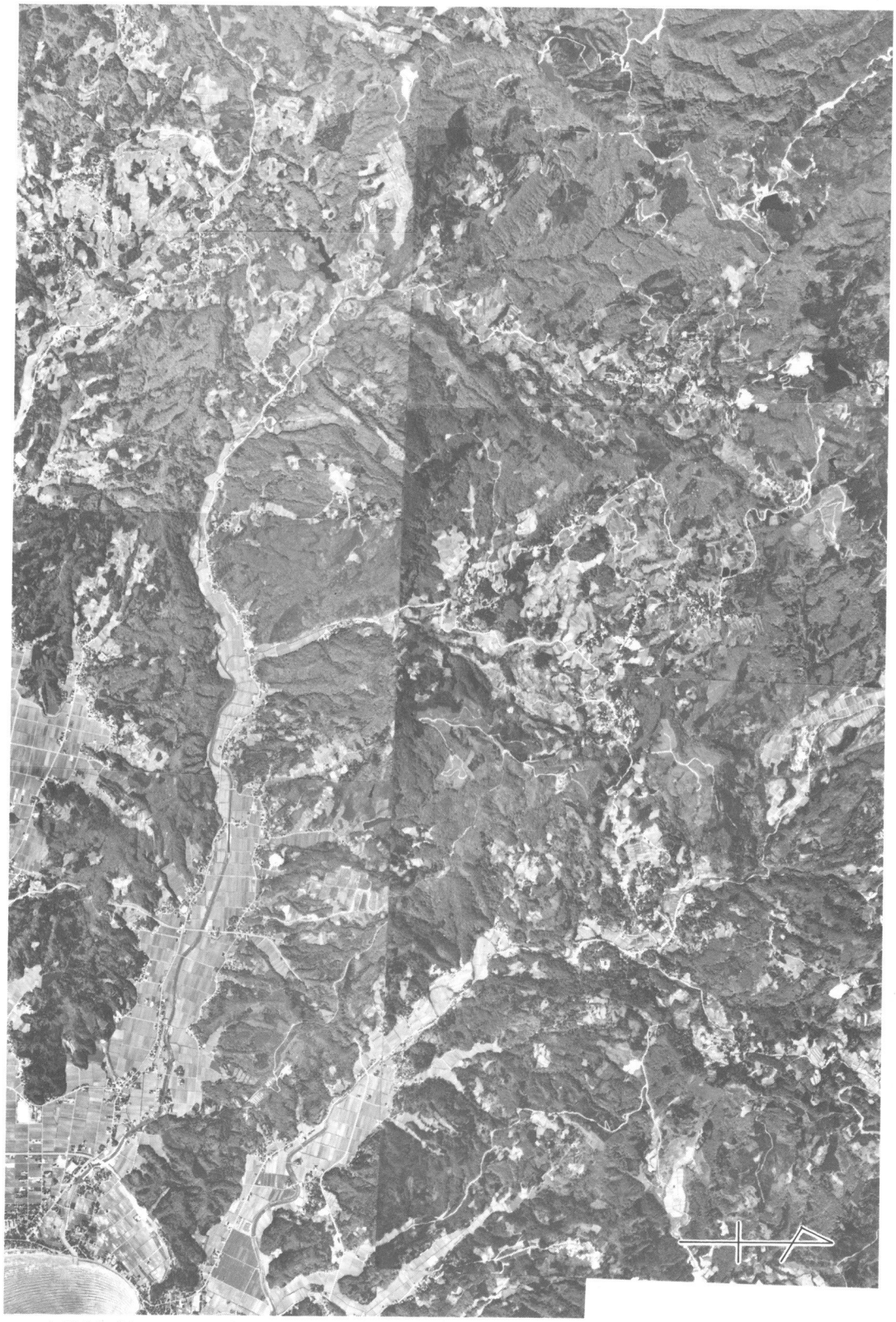
図　　版

図版一　E地区航空写真（一）



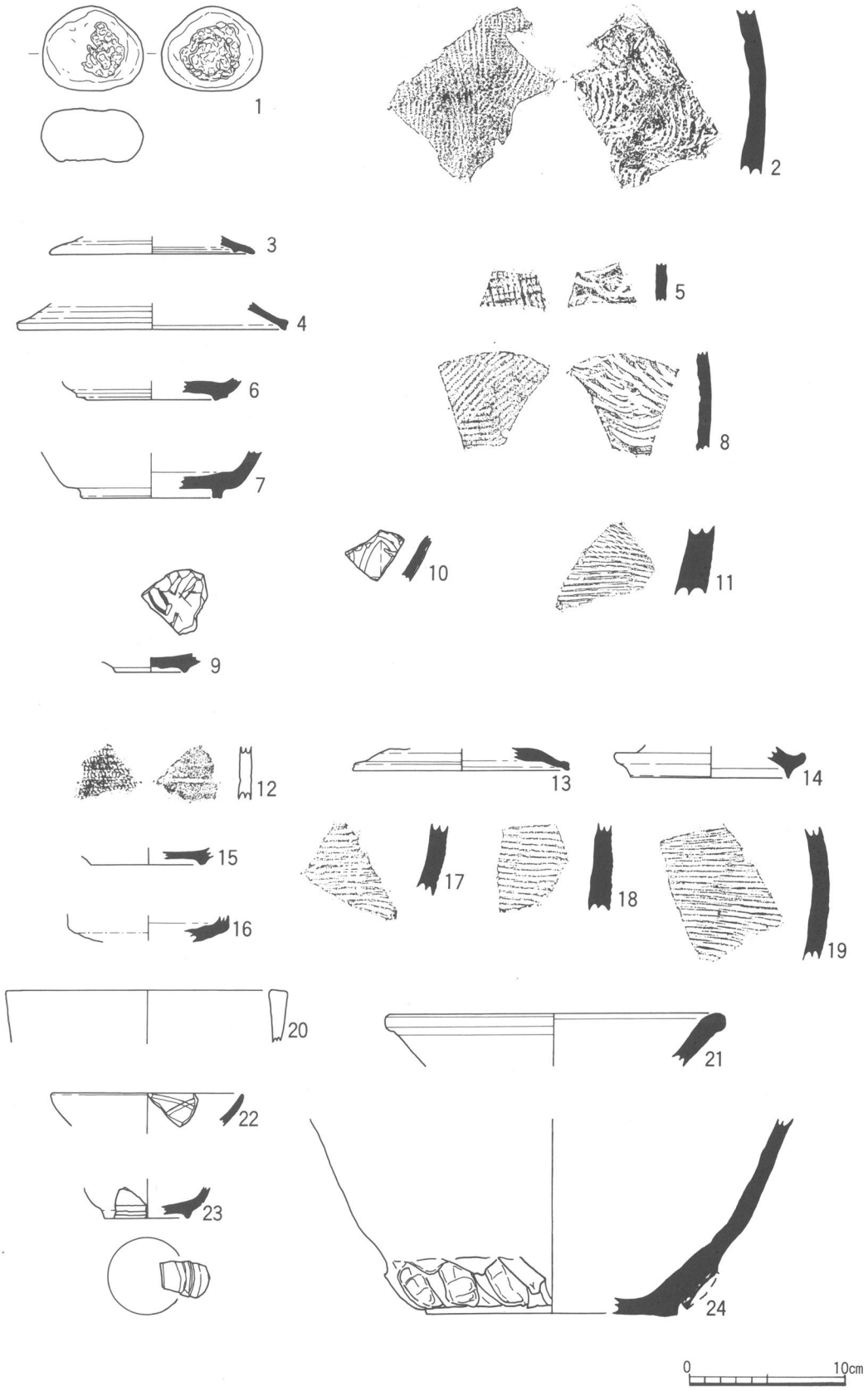
1947年撮影（縮尺1/50,000）

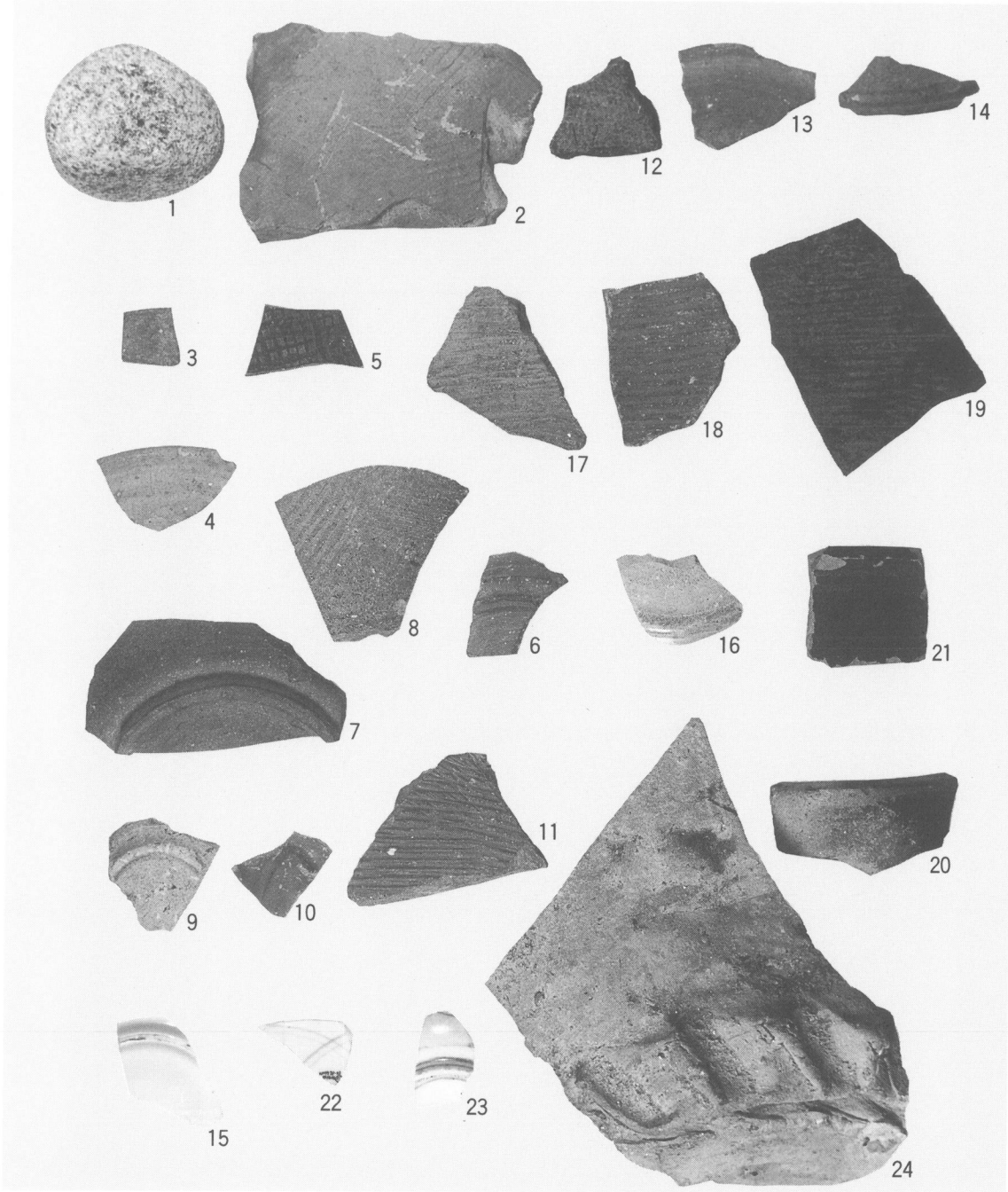
図版二　E地区航空写真(二)



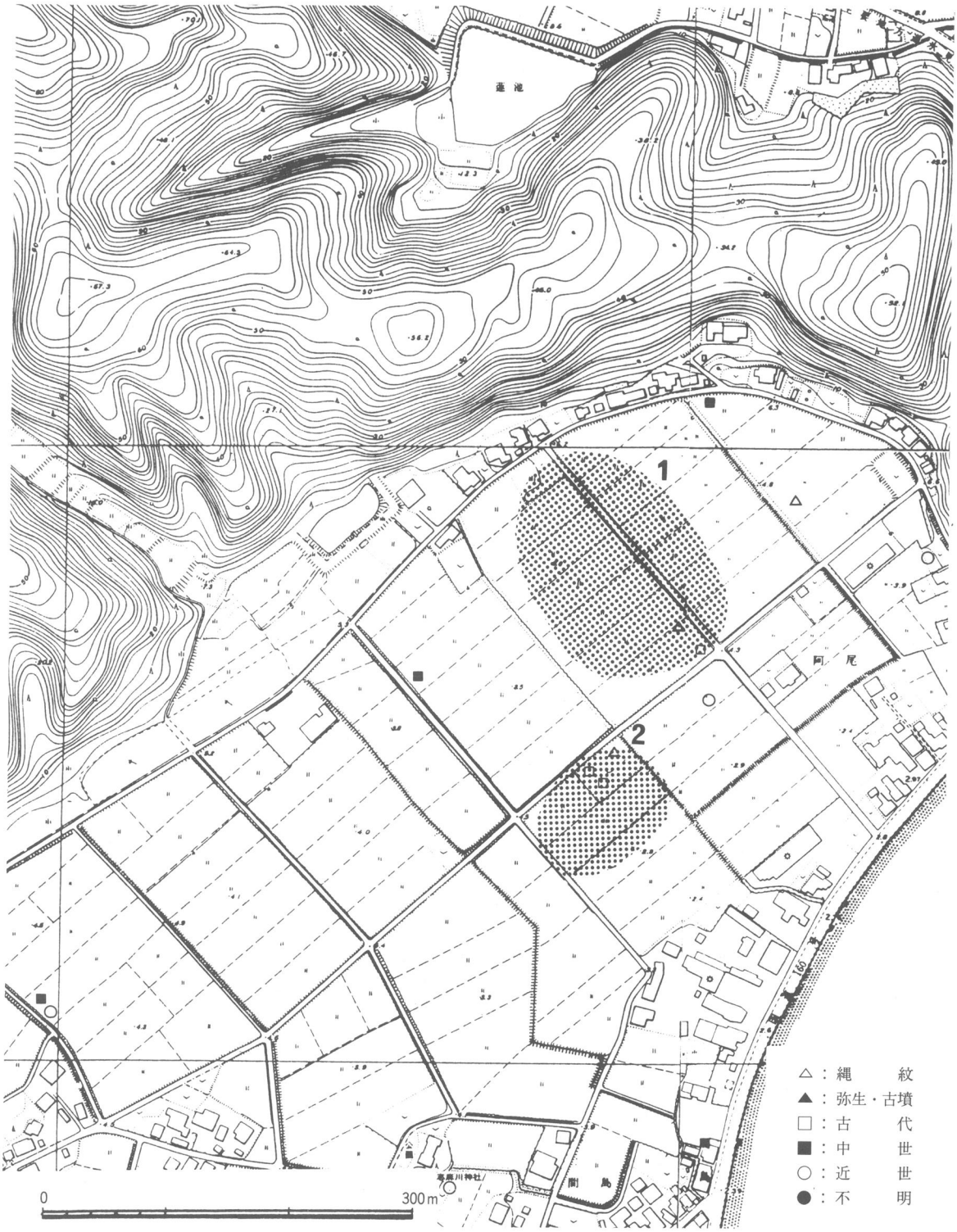
1992年撮影（縮尺1/50,000）

図版三　遺物実測図




1
2
12
13
14
3
5
17
18
19
4
8
6
16
21
7
11
20
9
10
15
22
23
24

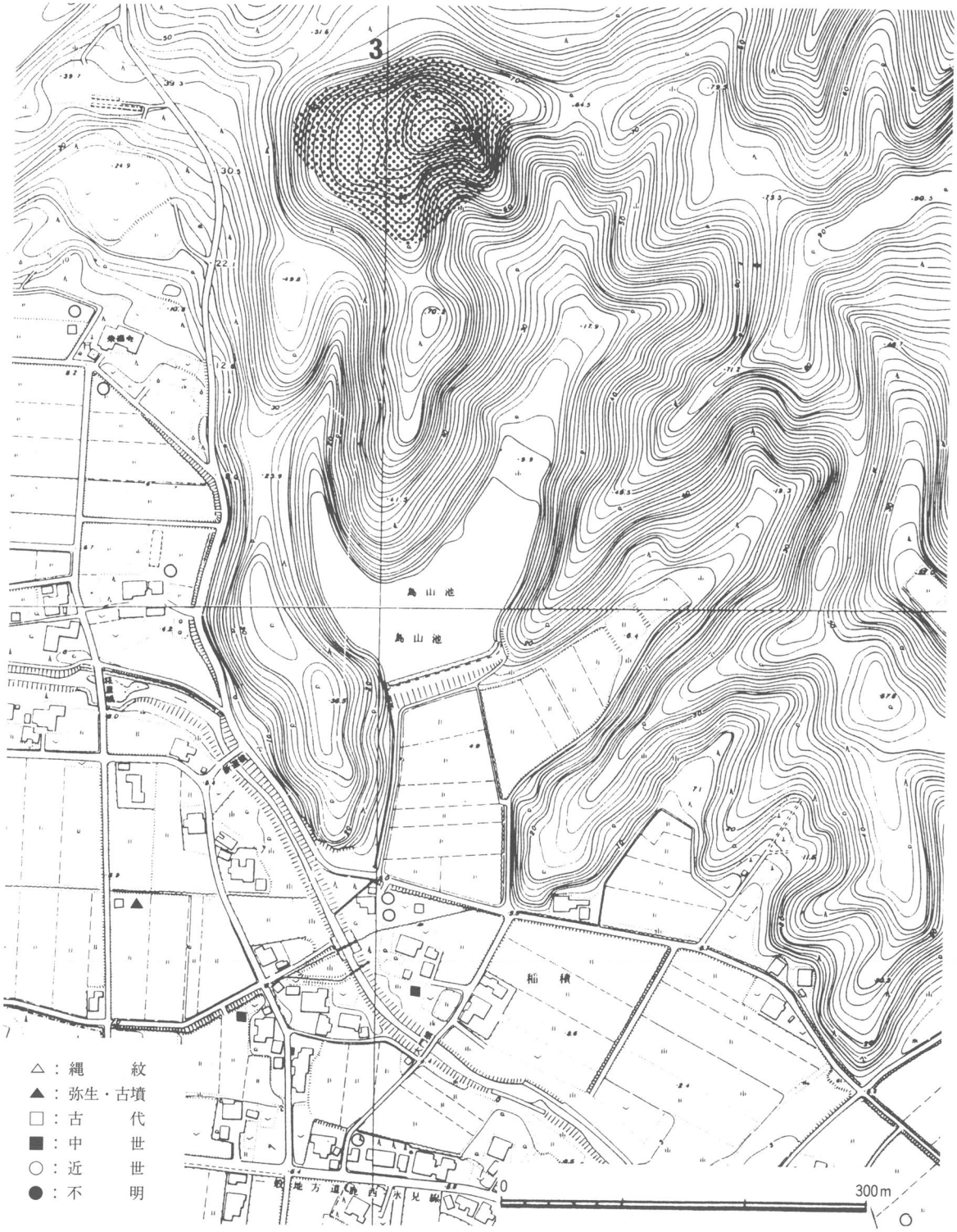
図版五　E地区の遺物と遺物採集地点



1　阿尾島田A遺跡　2　阿尾島田B遺跡

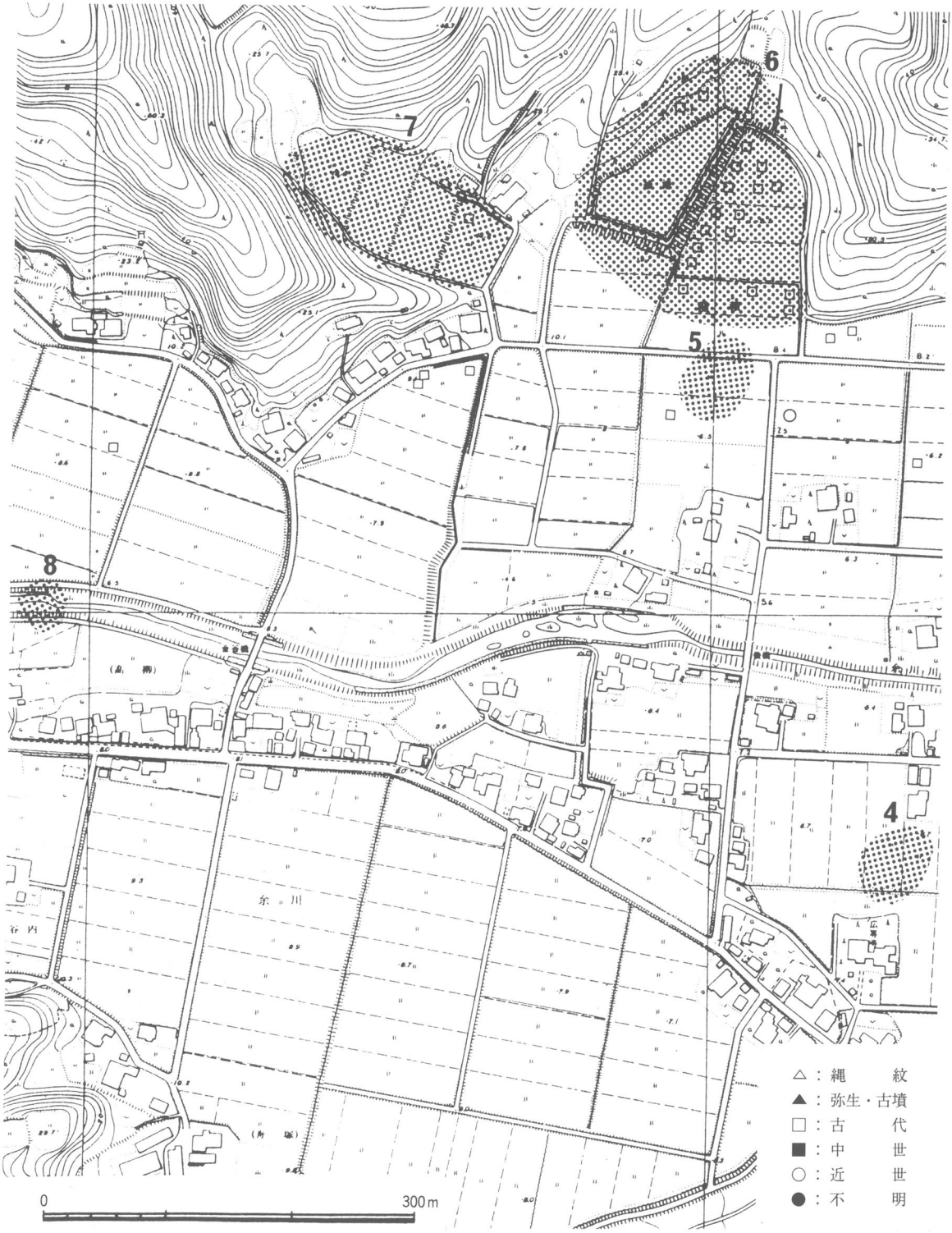
（縮尺 1/5,000）

図版六　E地区の遺跡と遺物採集地点(2)



(縮尺 1/5,000)

図版七　E地区の遺跡と遺物採集地点(3)



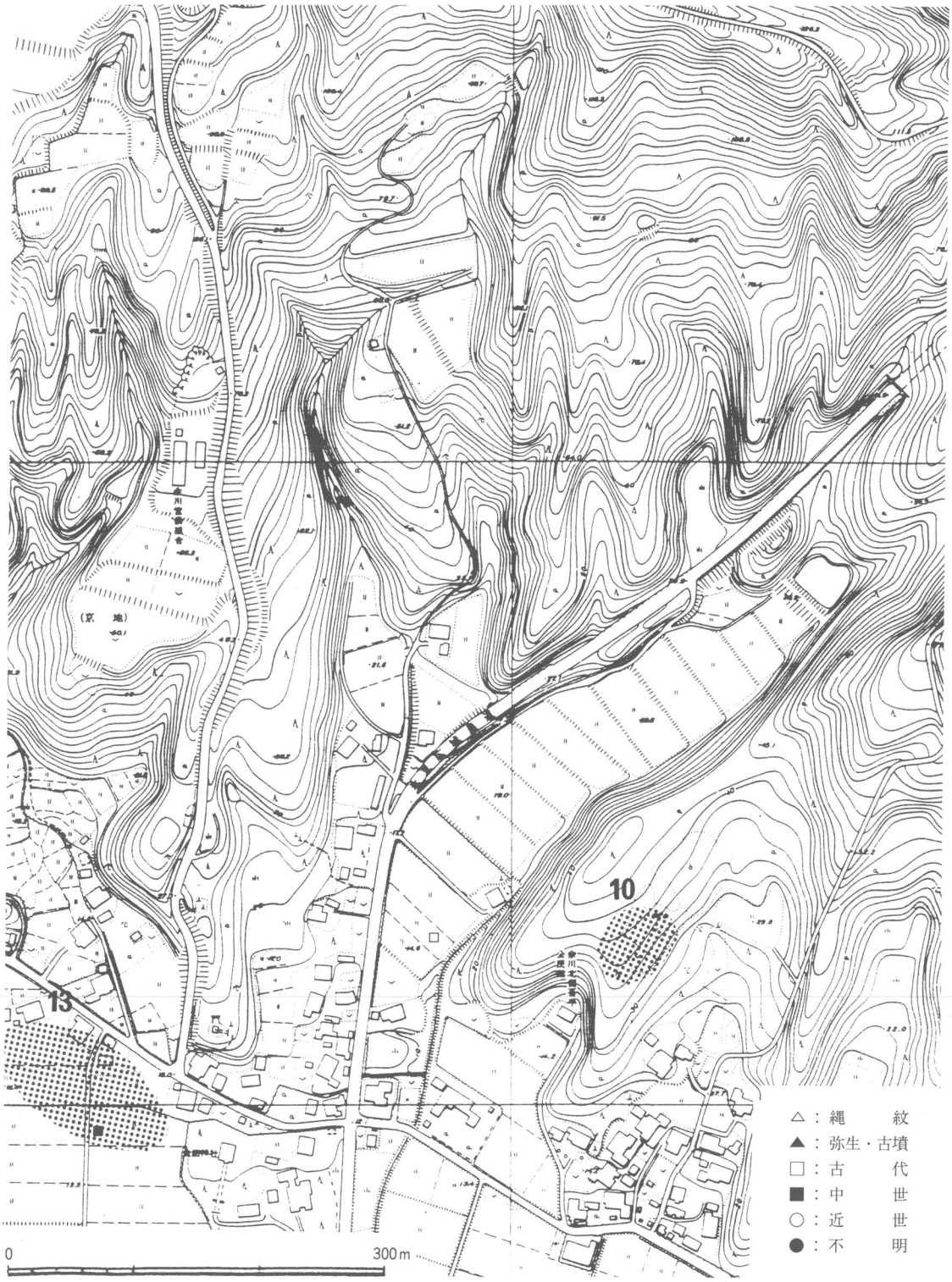
4　稲積前田遺跡　5　稲積西ヶ谷内遺跡　6　稲積後池遺跡　7　余川親ヶ谷内遺跡　(縮尺 1/5,000)
8　余川川河床遺跡

図版八　E地区の遺跡と遺物採集地点(4)

8 余川川河床遺跡　9 余川海老田　11 余川寺ヶ谷内遺跡　12 余川片畑遺跡

(縮尺 1/5,000)

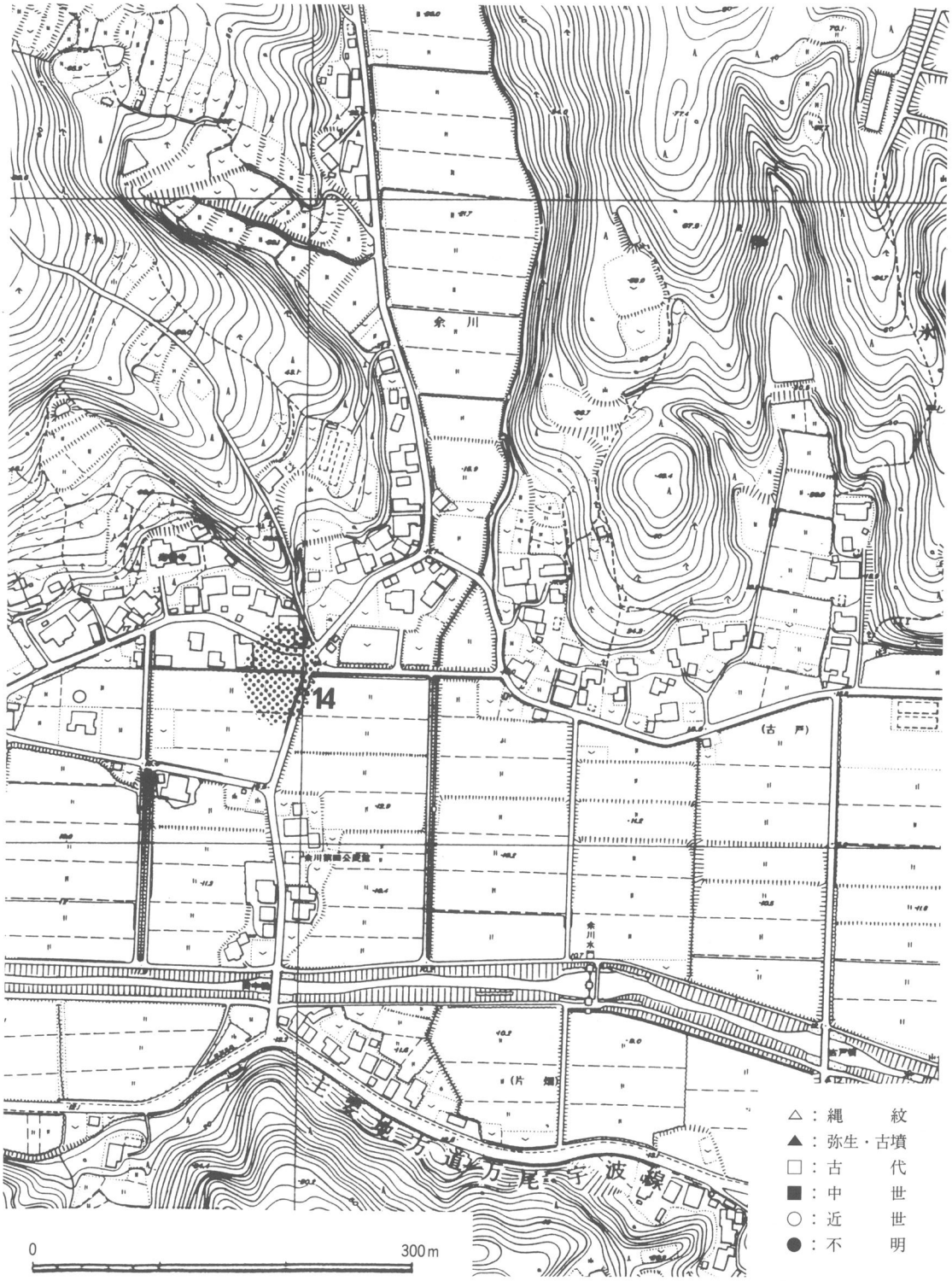
図版九　E地区の遺跡と遺物採集地点(5)



10 余川古寺谷内遺跡　13 余川善名遺跡

(縮尺 1/5,000)

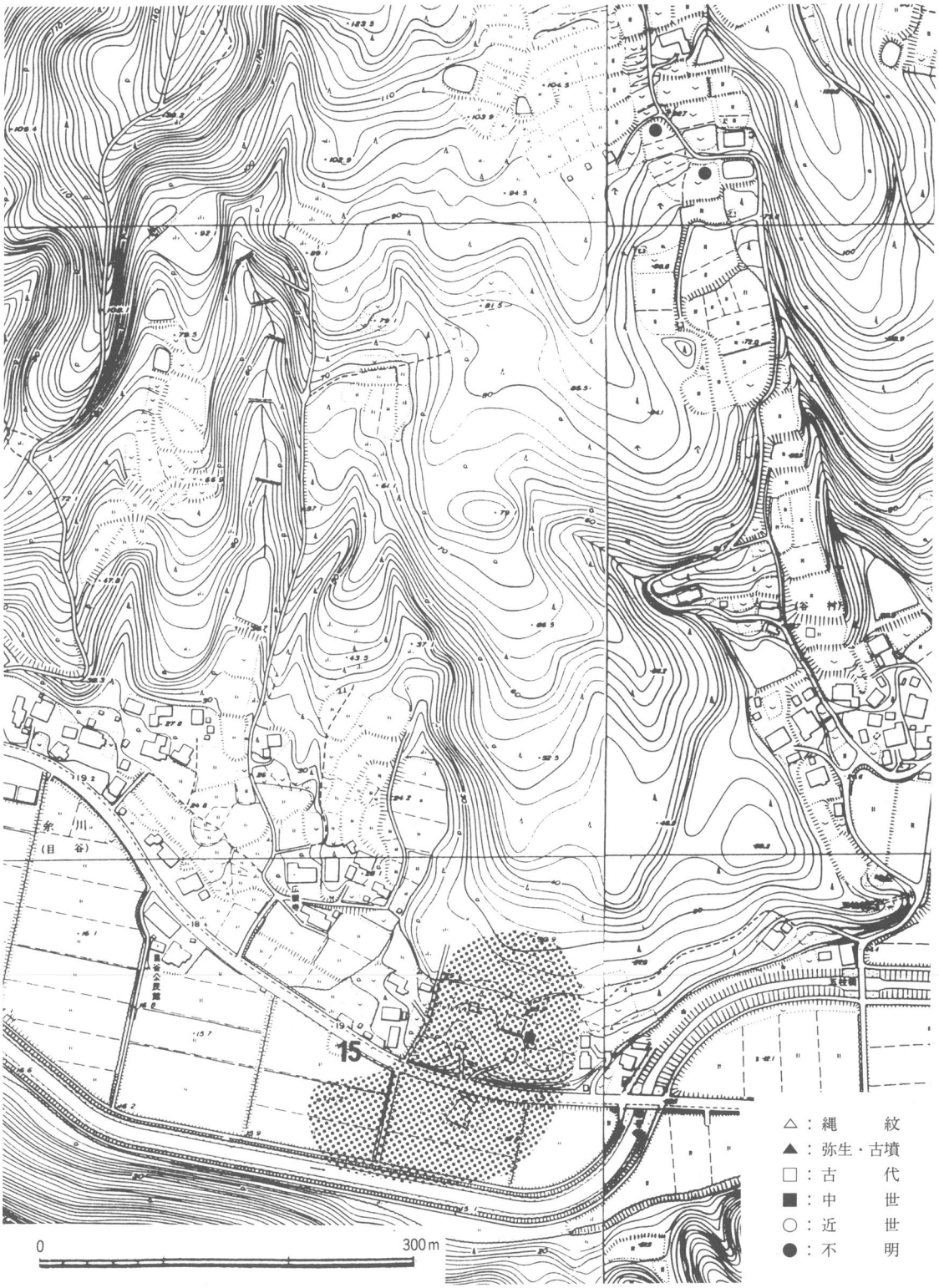
図版一〇　E地区の遺物採集地点(6)



14 余川谷村遺跡

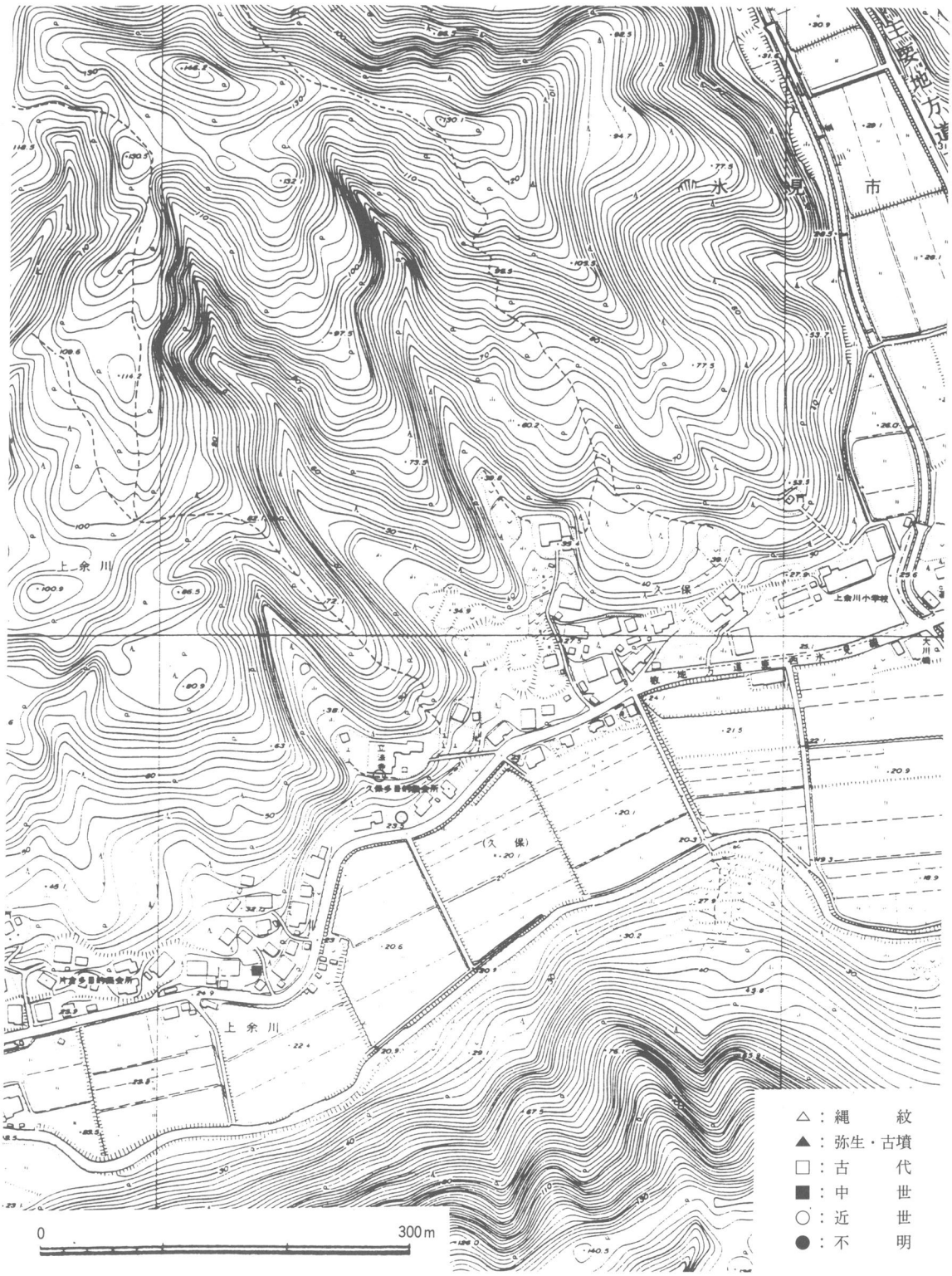
(縮尺 1/5,000)

図版一一　E地区の遺跡と遺物採集地点(7)



15 余川市谷遺跡　　(縮尺 1/5,000)

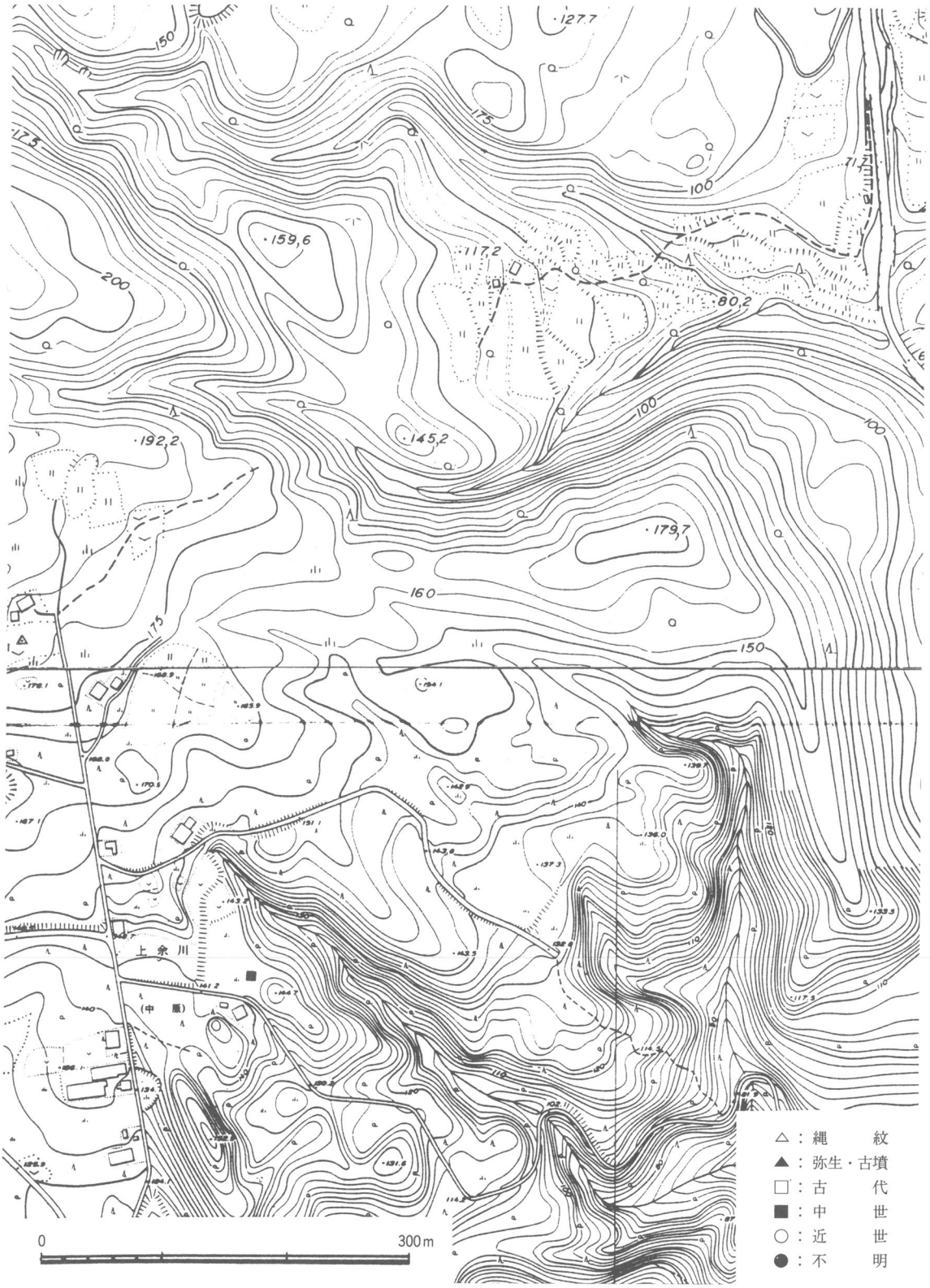
図版一二　E地区の遺跡と遺物採集地点(8)



△：縄　　紋
▲：弥生・古墳
□：古　　代
■：中　　世
○：近　　世
●：不　　明

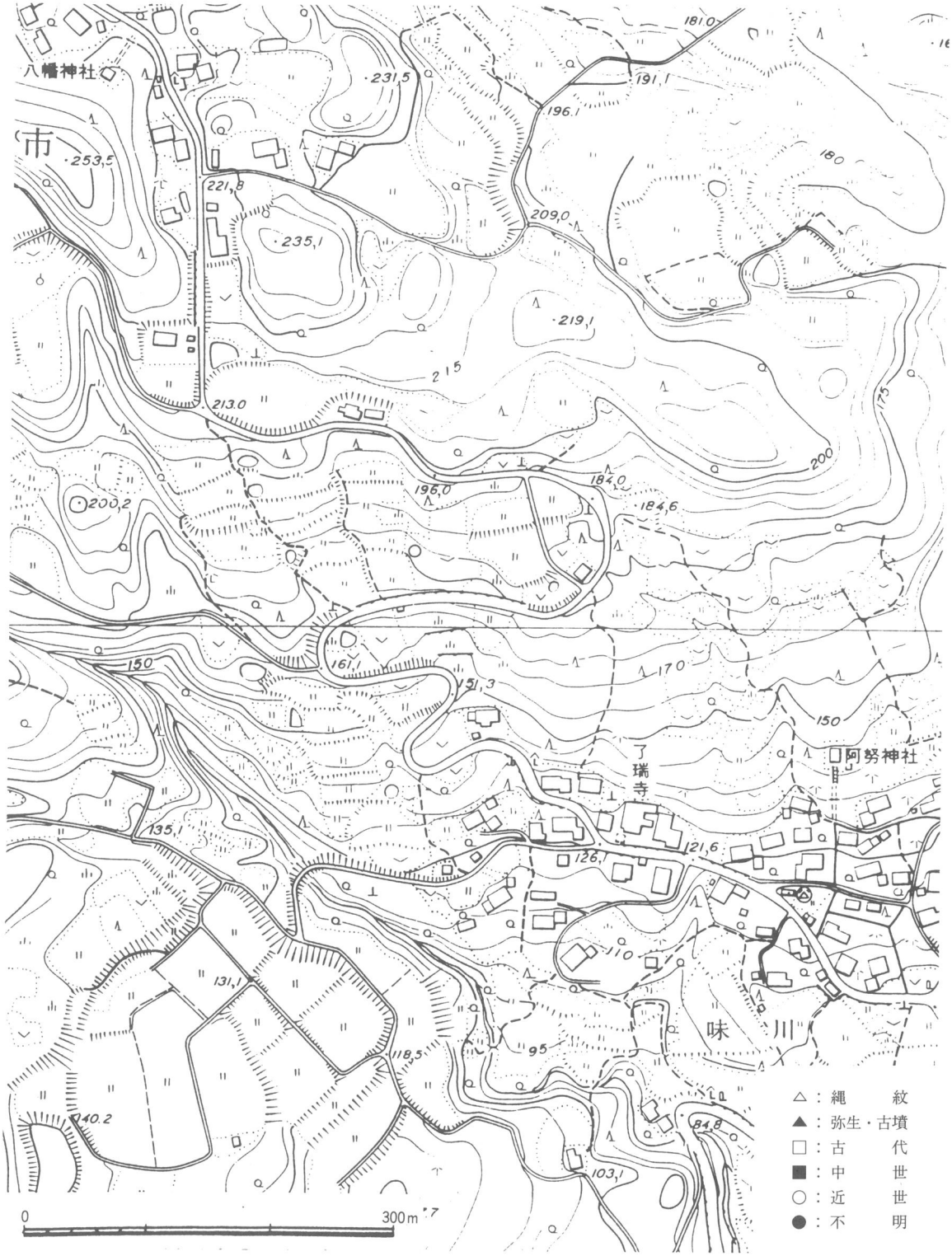
(縮尺 1/5,000)

図版一三　E地区の遺跡と遺物採集地点(9)



(縮尺 1/5,000)

図版一四　E地区の遺跡と遺物採集地点(10)



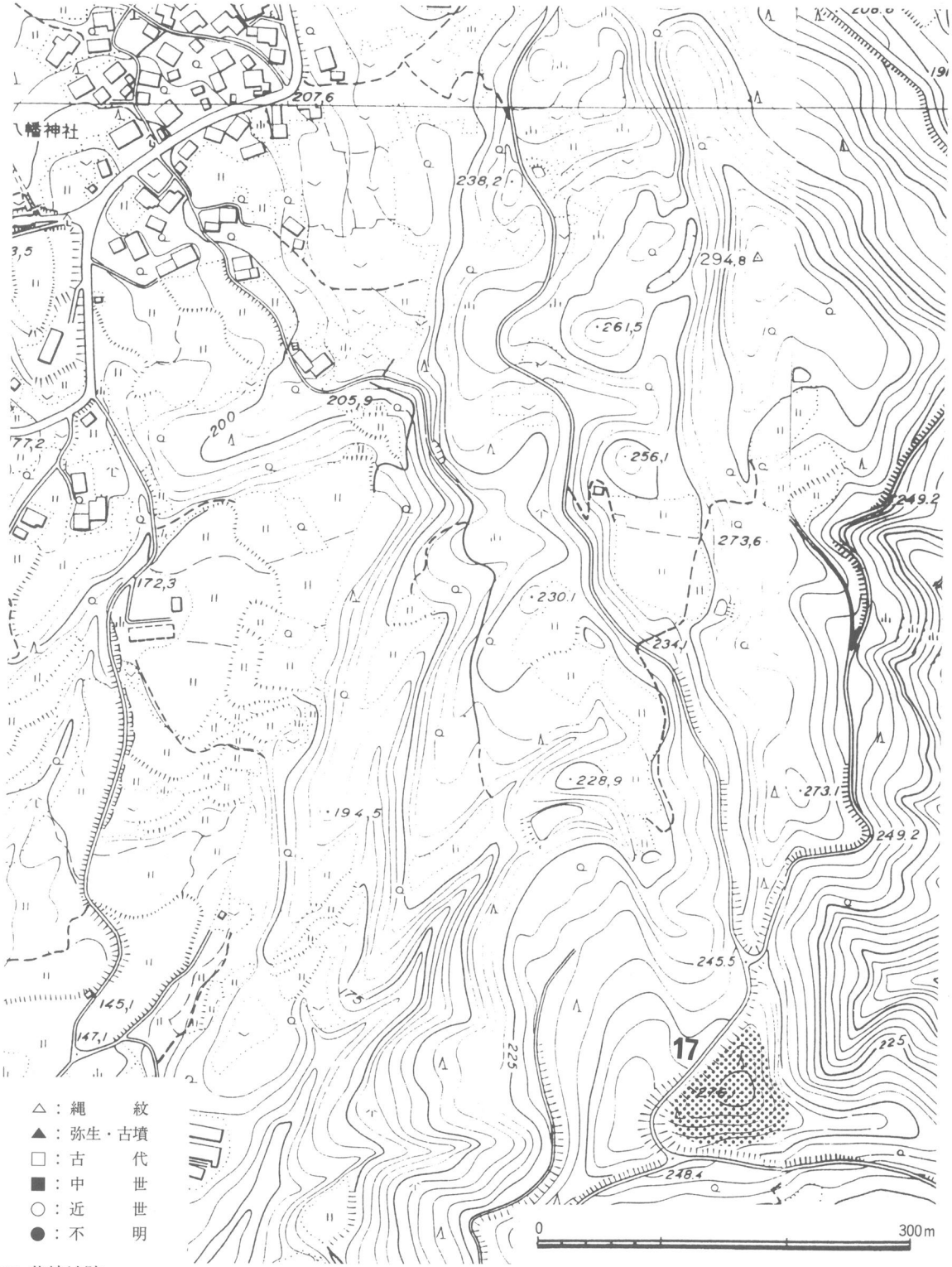
（縮尺 1/5,000）

図版一五　E地区の遺跡と遺物採集地点(11)

16 一ノ瀬遺跡

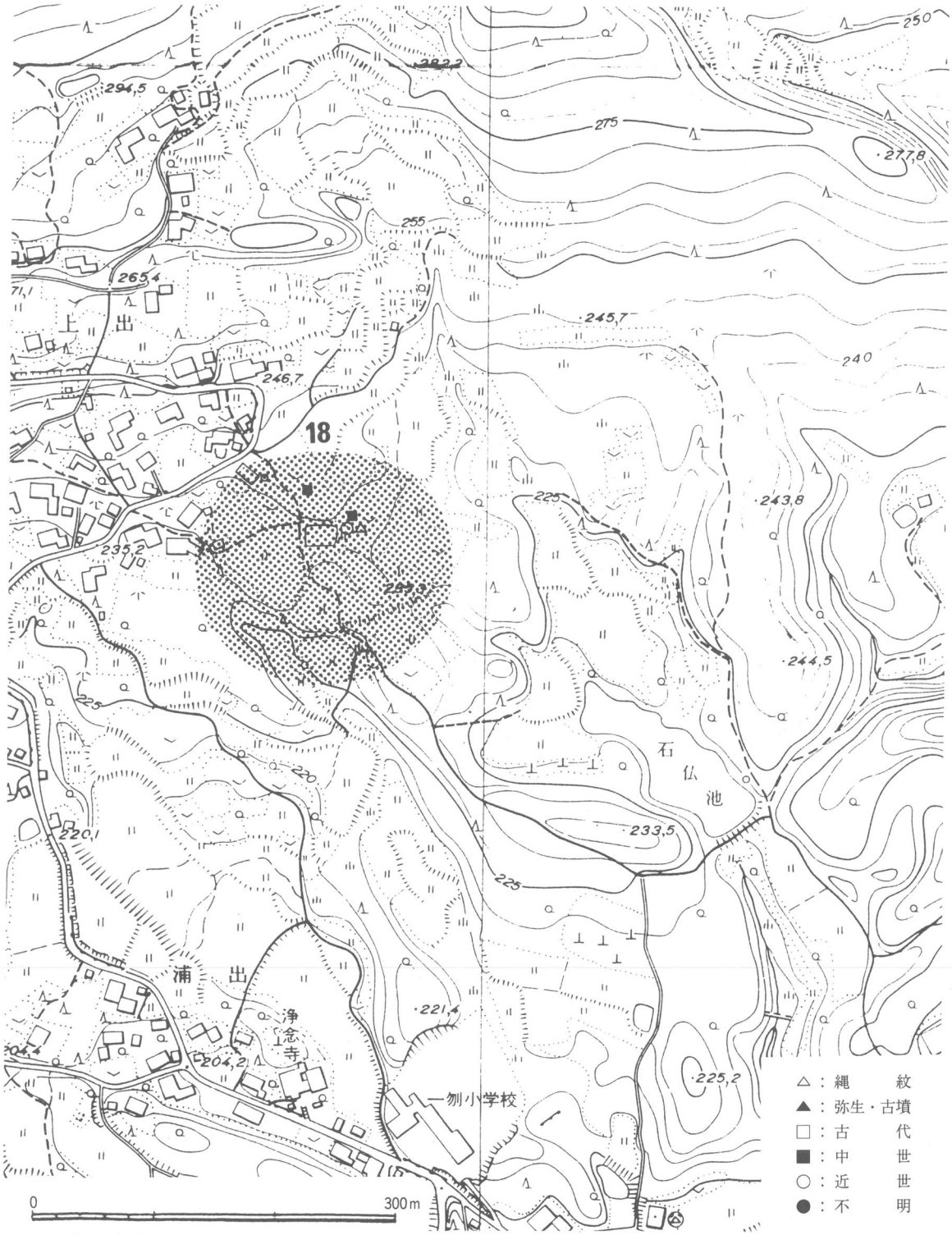
(縮尺 1/5,000)

図版一六　E地区の遺跡と遺物採集地点(12)



17 柴峠城跡

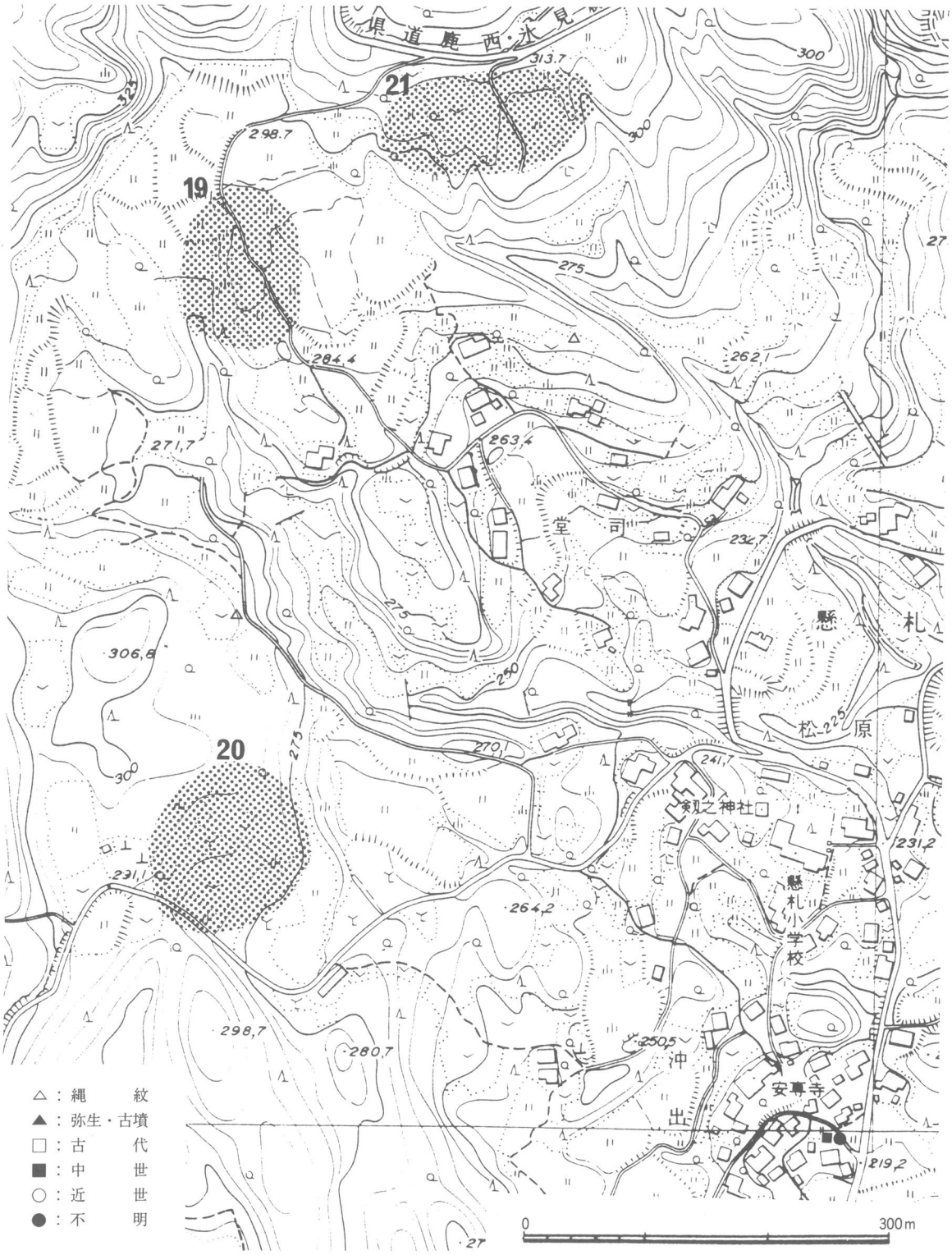
(縮尺 1/5,000)



18 一刎前田遺跡

(縮尺 1/5,000)

図版一八　E地区の遺跡と遺物採集地点(14)



19 懸札上ノ前遺跡　20 懸札宮が谷　21 懸札ホウシバラ遺跡　(縮尺 1/5,000)

1998年３月25日　印刷
1998年３月31日　発行

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅴ
氷見市埋蔵文化財調査報告書第25冊

編集・発行　氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室

印　刷　ヨシダ印刷株式会社